

# 上月隈 4

上月隈遺跡第4次調査報告



2011

福岡市教育委員会



上月隈遺跡第4次調査地点 調査区全景（南東から）



SX-01出土 弥生土器



化石入り貝岩 滑石製磨製石斧



SD-09出土 丹塗土器

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

本書は、上月隈遺跡第4次調査の成果を報告するものであります。本調査では弥生時代の溜井遺構をはじめとし古代および中世の集落遺跡の一部を調査し、月隈丘陵上に展開する遺跡の全容を解明するまでの多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで賜りました多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

# 例言

1. 本書は、福岡市博多区月隈3丁目27番地内における公民館施設建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成21年度（2009年度）に実施した上月隈遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は本田・松尾奈緒子が作成し、本田が製図した。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より6°21' 西偏している。なお、本書に使用している座標は、日本測地系を用いている。
5. 本書に使用した遺物実測図は本田・平川啓二が作成し、本田が製図した。
6. 遺物実測図の縮尺は土器類を1/3・1/4に、石器等は1/1・2/3の縮尺に統一した。
7. 石器の分類・一覧表の作成は、埋蔵文化財第2課吉留秀敏があたった。
8. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
9. 上月隈遺跡関連資料として「付論 稲居塚城の縄張りについて」を山崎龍雄が執筆した。
10. 本書で使用した遺構写真は本田・松尾が撮影した。
11. 本調査に関する記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

## 本文目次

上月隈遺跡の立地と環境.....	1
月隈丘陵での調査事例.....	1
第一章　はじめに.....	3
(一) 調査にいたる経緯.....	3
(二) 調査体制.....	3
第二章　発掘調査の記録.....	4
(一) 調査の概要.....	4
(二) 基本解説.....	7
(三) 遺構と遺物.....	9
SX-01・溜井遺構.....	9
SD-09・導水遺構.....	18
SE-02・井戸遺構.....	24
土坑.....	26
その他の遺構.....	26
石器.....	27
第三章　まとめ.....	34
付論　稲居塚城の縄張りについて　山崎龍雄.....	37

## 上月隈遺跡の立地と環境

福岡平野は背後を三郡山系や背振山地・油山等の山塊によって三方を囲まれ、これらの山塊を源流とする御笠川や那珂川をはじめとする河川が平野を貫流して博多湾に注いでいる。福岡平野の東側には三郡山地から派生して伸びる大城山（四王寺山）の山麓に古第三紀層で形成された月隈丘陵が南東から北西へと長くのび、柏屋平野との境をなしている。この南北に長い月隈丘陵からは、西側へと伸びる舌状丘陵が幾筋も派生しており、この丘陵上には堀柵墓群をはじめとする弥生時代の遺跡が点在するよう伸びている。これらの丘陵間には狭い谷水田の存在が知られており、丘陵上に展開する弥生時代遺跡が積極的に地形を改変し谷水田を営んでいたことが知られている。

今回報告を行う上月隈遺跡は、福岡市文化財分布地図「東部Ⅰ.下月隈10」で周知化・登録された遺跡で、福岡市博多区大字上月隈に位置し、字図では遺跡が展開する丘陵は大字上月隈字山浦と大字下月隈本元庵とにまたがり、丘陵の尾根線が字境となっている。上月隈遺跡は月隈丘陵の西麓の支丘上に立地しているが、昭和初期の古地図を見ると、東側には開析された狭い谷がのびているため一見独立丘陵状をなし、北側約400mに位置する天神森遺跡と立地的な条件では共通性を持っている。

### 月隈丘陵での調査事例

上月隈遺跡の展開する月隈丘陵は、米軍の弾薬倉庫や採石場・果樹園が存在していたことから、長い間遺跡の空白地帯であった。昭和40年代に金隈遺跡や宝満尾遺跡が発掘調査された以外は、土探し中に発見された堀柵墓が知られている程度であった。いずれも堀柵墓等で構成される集団墓であり、これを営んだ集落や生産基盤である水田などとの位置的な関連が明確にはされず、その地域相は明らかではなかった。1972年の米軍基地返還後は月隈丘陵内での詳細な分布調査が実施され、1975年の席田総合運動公園建設に先立って8地点で発掘調査が実施された（市報第91集）。その結果、丘陵上に弥生時代から古墳時代の堅穴住居や墳墓群が点在していることが確認され、多数の遺跡が存在していることが判明した。

旧石器時代から縄文時代については各遺跡で遺物が散見される程度で遺構の検出例は現時点では知られていない。弥生時代前期になると宝満尾遺跡や影ヶ浦遺跡などで貯蔵穴が検出され、中期から後期にかけては遺構の増加が顕著となる。久保園遺跡や席田大谷遺跡では集落が確認され、検出された遺構から拠点的な集落であったことが想定されている。また、席田大谷遺跡（赤穂ノ浦遺跡）からは横帶文銅鋸鋳型や石製銅戈鋒型模造品が出土しており、月隈丘陵内に青銅器生産に携わる集団が存在していたことが推定される。上月隈遺跡周辺の丘陵西側へ派生する舌状丘陵上に展開する弥生時代の主な墳墓群を見ると、北方へ谷を挟んだ舌状丘陵には下月隈B遺跡（下月隈宮ノ森遺跡）、天神森遺跡、宝満尾遺跡、宝満尾東遺跡、久保園遺跡、中尾遺跡、青木遺跡、下臼井遺跡等の遺跡群が続く。一方、南側には立花寺遺跡や一大墳墓遺跡で国指定史跡でもある金隈遺跡が知られており、さらに南側には中・寺尾遺跡、森園遺跡が続いている。この中でも上月隈遺跡第3次調査地點からは中期後半の堀柵墓に中細型銅劍やガラス製管玉、宝満尾遺跡では後期後半の土壙墓からは異体字銘体鏡が出土しており、月隈丘陵内に複数の有力者層が存在していたことが看取られる。

月隈丘陵の西側に面する沖積地においては、雀居遺跡、下月隈C遺跡、立花寺B遺跡などが点在しており、沖積地内の微高地上に営まれた弥生時代から中世にかけての集落や、低地を利用した水田遺構の状況が発掘調査によって明らかにされつつある。丘陵部に展開する遺跡群と、沖積地に存在する遺跡群との相互的な関連性は解明されていない部分が多く、今後の課題として残されている。

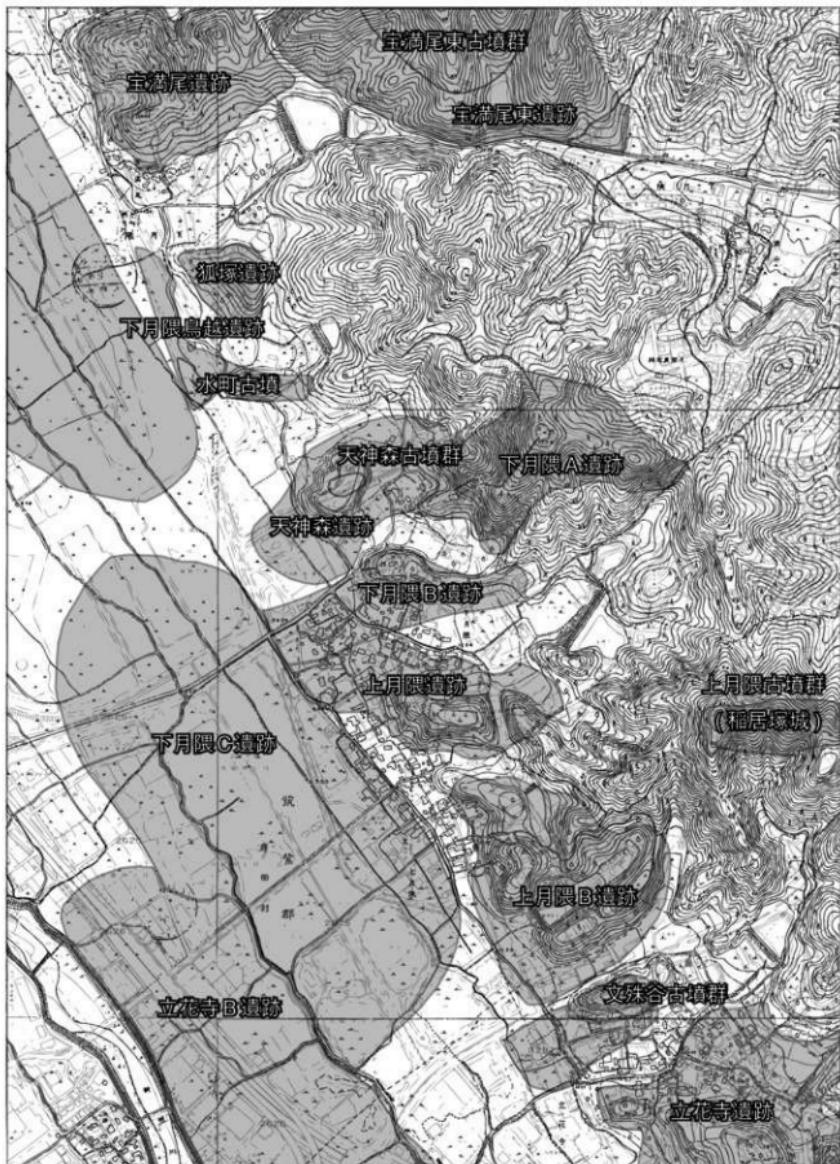


Fig.1 上月隈遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1/5,000)

# 第一章 はじめに

## (一) 調査にいたる経緯

平成20年8月22日、市民局コミュニティ推進部公民館整備課より福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に対して、博多区月隈3丁目27番地内における公民館施設建設予定地内に関しての埋蔵文化財の事前審査依頼（審査番号20-1-42）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である上月隈遺跡として周知の包蔵地内に含まれており、申請地の周辺では数次の発掘調査がこれまでに行われていることから、申請地内においても良好に遺構が存在していることが推測された。これを受け埋蔵文化財課は平成20年9月10日に現地での確認調査を行った。その結果、現地表面から80~110cmほど掘り下げた暗黄灰色砂質土層面上において古代から中世にかけての土坑などの遺構と弥生時代の遺物の存在を確認した。これらの遺構は、建設工事に伴う基礎工事による破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課がこれをを行うこととなり、平成21年4月16日によて着手し、同年7月3日に終了した。

## (二) 調査体制

調査委託	市民局コミュニティ推進部公民館整備課				
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田 裕嗣		
調査総括	同 文化財部	部長	宮川 秋雄		
	同 埋蔵文化財第1課	課長	濱石 哲也		
	同 埋蔵文化財第1課	調査係長	米倉 秀紀		
調査庶務	同 文化財管理課		山本 朋子（前任）		
			古賀 とも子		
調査担当	同 埋蔵文化財第1課	事前審査係	星野 恵美（事前審査）		
		調査係	本田 浩二郎（本調査）		
			松尾 奈緒子		

調査作業	石川洋子	上野照明	大庭智子	小野千佳	小野山次吉	片岡博子
	唐島栄子	許斐拓生	草場恵子	坂下達男	渋谷一明	清水 明
	田中トミ子	豊丸秀仁	永田とみ子	中村桂子	野口リウ子	服部弘勝
	濱地静子	林厚子	北条こずえ	村山巳代子	山下智子	結城フヂコ

整理作業 松下伊都子 宮崎由美子 吉盛泉

遺跡調査番号	0903	遺跡略号	KTG4
調査地地番	福岡市博多区月隈3丁目27番地	分布地図番号	下月隈10
開発面積	890.00m <sup>2</sup>	調査面積	757.71m <sup>2</sup>
調査期間	2009.04.16~2009.07.03	調査原因	公民館施設建設

## 第二章 発掘調査の記録

### (一) 調査の概要

上月隈遺跡は、福岡平野の東縁をなす月隈丘陵の中央部西側に位置する。遺跡が立地する地形は月隈丘陵から北西側へと長く延びる低丘陵（本報告内では以下、上月隈丘陵とする）と北側谷部から構成されている。現在、これらの地形は宅地化と道路建設等に伴い大きく改変されている。丘陵は数カ所で切断され独立丘陵状の形をなすが本来は連続する地形であったことが古地図から読み取れる。このような地形改変の歴史は古く、果樹園の造成や軍事施設、土取り工事などで多くの遺跡が消滅したことが知られている。

今回報告を行う、上月隈遺跡第4次調査地点は遺跡範囲の東端部に位置する（Fig.2参照）。これまで上月隈遺跡では3次の発掘調査が実施されており、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が検出され、弥生時代中期以降活発に集落・墳墓が営まれていたことが知られている。第4次調査地点は空港対策用地として管理されていた箇所であり、現状は段造成された更地で北西側に向かい緩やかに傾斜する地点であった。空港管理地となる以前は宅地であり、これに伴う石垣などは撤去されずに残されていた。また、調査区内で確認された擾乱坑内にはブロックなどの廃材が多量に投棄されていたため、これらについては分別を行った上で処理を行っている。

調査区はFig.1で確認できるように、幅約30m、奥行き70m（南側道路設置以前は120m程度）の谷地形の開口部西側に位置するため、少量の降雨でも大量の雨水が調査区内に流入するような状況であった。この地形は、奥深く狭い谷地形を多く抱える月隈丘陵内ではよく見られるもので、各所に堤で堰き止め形成された溜め池が点在している。これらの溜め池は生活用水のほか谷間の水田や果樹園への散水に使用されたもので、河川とは異なる水の供給源として旧来より活用されてきたのである。

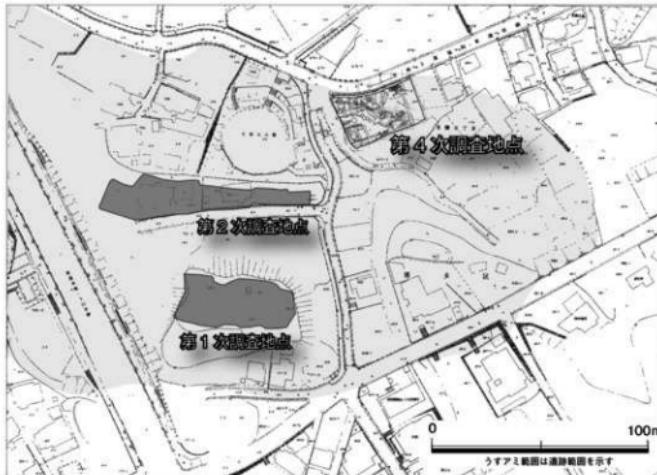


Fig.2 調査区位置図 (S=1/2,000)



Fig.3 第4次調査地点全体図 (S=1/200)

調査は事前に行われた試掘調査の成果、及び表土掘削中の土層観察により遺構面を設定して掘り下げを行った。試掘調査の成果では現地表面から60~100cmほど掘り下げた暗黄灰褐色砂質土層面上で遺構が検出されており、これに基づいて調査着手以前に近世から現代までの整地層・造成土を掘削し、遺構面の設定と遺構検出を開始した。調査では、弥生時代中期から後期にかけての溜井遺構をはじめ、これに導水する溝状遺構、中世の井戸遺構や不定形土坑、建物としてはまとめきれない柱穴群などの遺構を検出し、この他には弥生時代以前の時期と考えられる複数の自然流路等を確認した。

上月隈遺跡は南北100m、東西280mで東西に伸びる遺跡範囲となっているが、これは一つの丘陵毎に遺跡範囲が設定されているため、広範囲に見ると多数の遺跡が月隈丘陵に存在している。これらの遺跡のなかには過去の削平により既に失われているものも多い。上月隈遺跡ではこれまで3次調査まで実施され、弥生時代中後期の集落や壟古墓群・古代から中世の集落等の遺構群が検出されているが、いずれの調査区も同一丘陵上（上月隈丘陵）に位置している。近年の試掘調査や発掘調査の成果より遺跡範囲は東側に拡大し、この丘陵の北側谷部の範囲を含むように変更されている。

調査対象地の現況は平坦な畠地であるが、これは近世以降に行われた開墾による段造成のためである。現地表面の標高は16~17m前後を測り、北西側に緩やかに傾斜する。調査は建物建設工事予定範囲約800mについて行ったが、一部安全対策のため未調査部分が発生し発掘調査の実施面積は757.7m<sup>2</sup>となった。試掘調査および表土掘削の結果、黄褐色砂質土層面で円形土坑などの遺構が検出されたためこの層位を遺構面として調査を行った。

検出した遺構面は標高15.8m~14.0mを測り、現地表面と同様に緩やかに北西側方向に傾斜する。調査区西側については南側から北側に延びる低丘陵が過去の地形測量図には示されるが、現状では開墾のため大きく削平されており平坦面となっている。削平により遺構はほぼ消滅しているが、この範囲は西側に位置する1次・2次調査地点から谷に向かって傾斜する地点であり、本来は弥生時代から中世までの遺構・遺物が存在していたものと考えられる。

調査区の北側半分は遺構密度は薄く弥生時代~古代までの遺物を含む黒褐色粘質土の包含層が堆積していた。包含層以下の谷内部には黒色粘質土層が厚さ20~30cm程度堆積しており、弥生時代以前は谷間の湿地帯という環境であったことが分かる。この黒色粘質土面に切り込む自然流路が複数検出されており、この流路埋土内からは縄文時代晚期前半の土器や石器・旧石器時代の石器や剥片などの遺物が出土した。谷の上部付近に該期の遺構群が存在していたことが推定できるが、現時点では遺跡の実態は確認されておらず包蔵地としても範囲指定はなされていない。

溜井遺構はこの谷内部に複数形成された自然流路を利用して造営されている。造営は弥生時代中期中頃に開始されており、4回以上の掘り直し・補修が行われ弥生時代後期前半までは確實に使用されている。造営初期の段階では溜井遺構の北側壁面に80cm~280m程度の木材を杭で固定して、流水作用により壁面が崩壊することを防ぐための補強を行っていた。これらの木材は一部に加工痕が観察でき、住居などに使用された構築材からの転用であった可能性も考えられる。流水による土砂の堆積がある程度進んだ段階で、掘り直し及び導水溝の切り替えが行われている。この際も過去の自然流路上に導水溝が掘削されており、効率的な導水管理が行われていたことが伺える。後期となり再び掘り直しが行われ、前段階と比較するとやや規模を拡大して掘削されたことが推測される。



Ph.1 調査区全景（南東から）



Ph.2 上月隈遺跡全景（東から）

## (二) 基本層序 (Fig. 4)

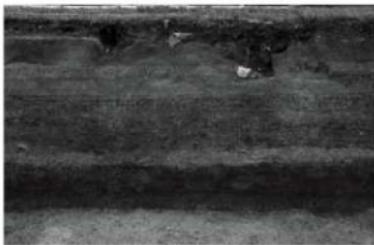
調査区は過去の段造成により大きく削平を受けていた。畠地造成以前の地形については不明確な部分が多いが、調査成果より推測できる旧地形についての説明を行いたい。明治期の測量図では調査区はすでに谷間に内に位置するように表現されている。遺構検出では調査区西側部分は近代以降の掘り込みしか確認できなかったことや観察できた堆積状況から、本来は調査区南側に位置する丘陵が更に北側まで延びていたことが考えられ、本調査区北西端部で検出したSD-14付近が本来の丘陵裾部の位置を示していることが推測できた。また、調査区南側トレンチの土層断面の観察からは、全体的に大規模な削平を受け、畠地造成のための水平堆積が弥生時代の遺構直上まで及んでいることが確認できた。旧来の地形も北側に向って緩やかに傾斜するため、北側部分では包含層は削平されずに残存していた。次に開墾による改変以前の地形・環境を把握するために南北方向トレンチを設定し、土層堆積状況の観察・検討を行った。その結果、調査区東側部分は谷開口部付近に形成された湿地帯に位置している時期があること、それ以後は離水環境となるが度々雨水などによって発生した自然流路が流れ込む状況であったことがわかる。帶水環境時に形成された黒色粘質土は調査区東側全域に広がる。この黒色粘質土層上面には植物生痕が観察できるがその分布には疎密の差が見られる。検出した複数の自然流路はいずれもこの粘質土に切り込んでいることがわかる。土層断面で確認できた自然流路は少なくとも5条以上有り、これらのうち最も西側の丘陵裾部に近い2条は地形に沿うように屈曲している。いずれも溜井遺構下に位置しており、後に掘削された溜井遺構にも地下湧水を供給していたものと考えられる。これらの自然流路の時期は埋土中に遺物がほとんど含まれていないことから確定は難しいが、縄文晚期前半に相当する土器片や旧石器時代の石器などが出土する。土器・石器はあまり摩滅されておらず、近接した箇所からの流入であることが推測される。



Ph.3 E-Fトレンチ土層断面（南から）



Ph.4 C-Dトレンチ土層断面（東から）



Ph.5 A-B土層断面（北から）



Ph.6 SX-15検出状況（南西から）

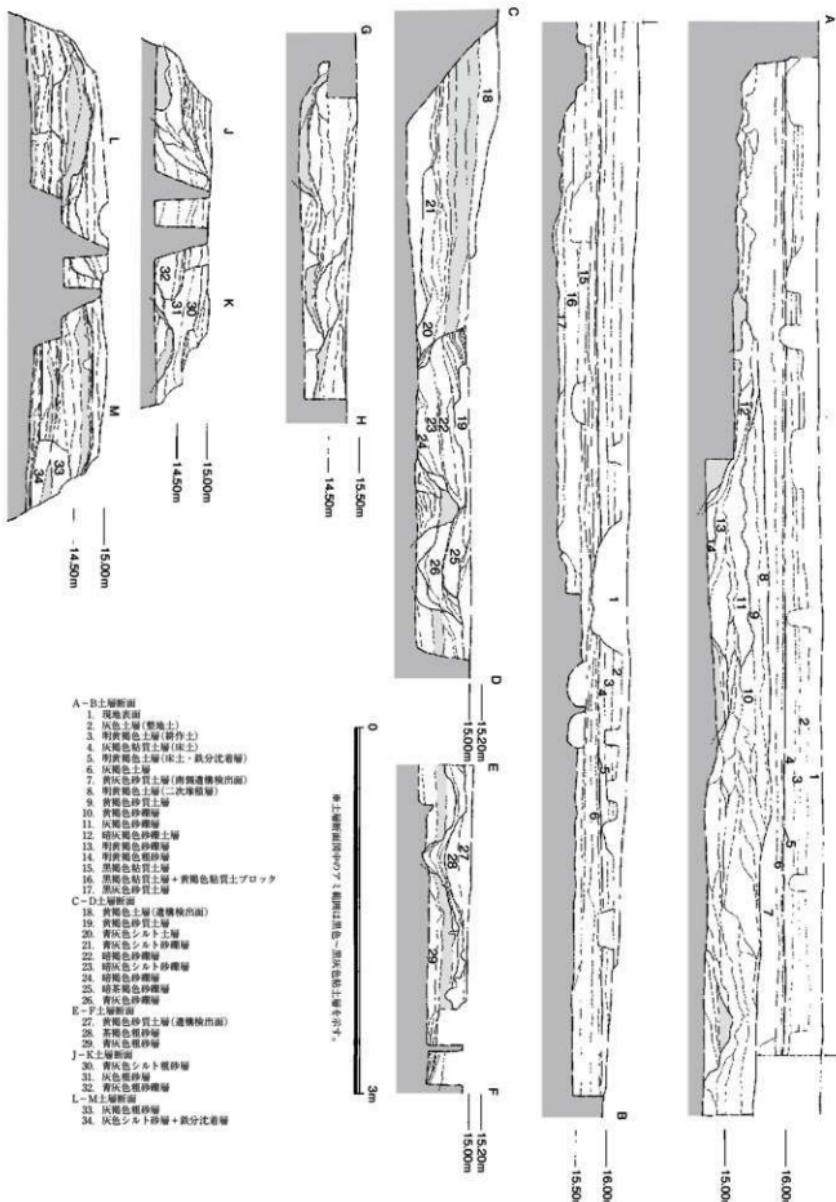


Fig.4 調査区土層断面実測図 (S=1/100)

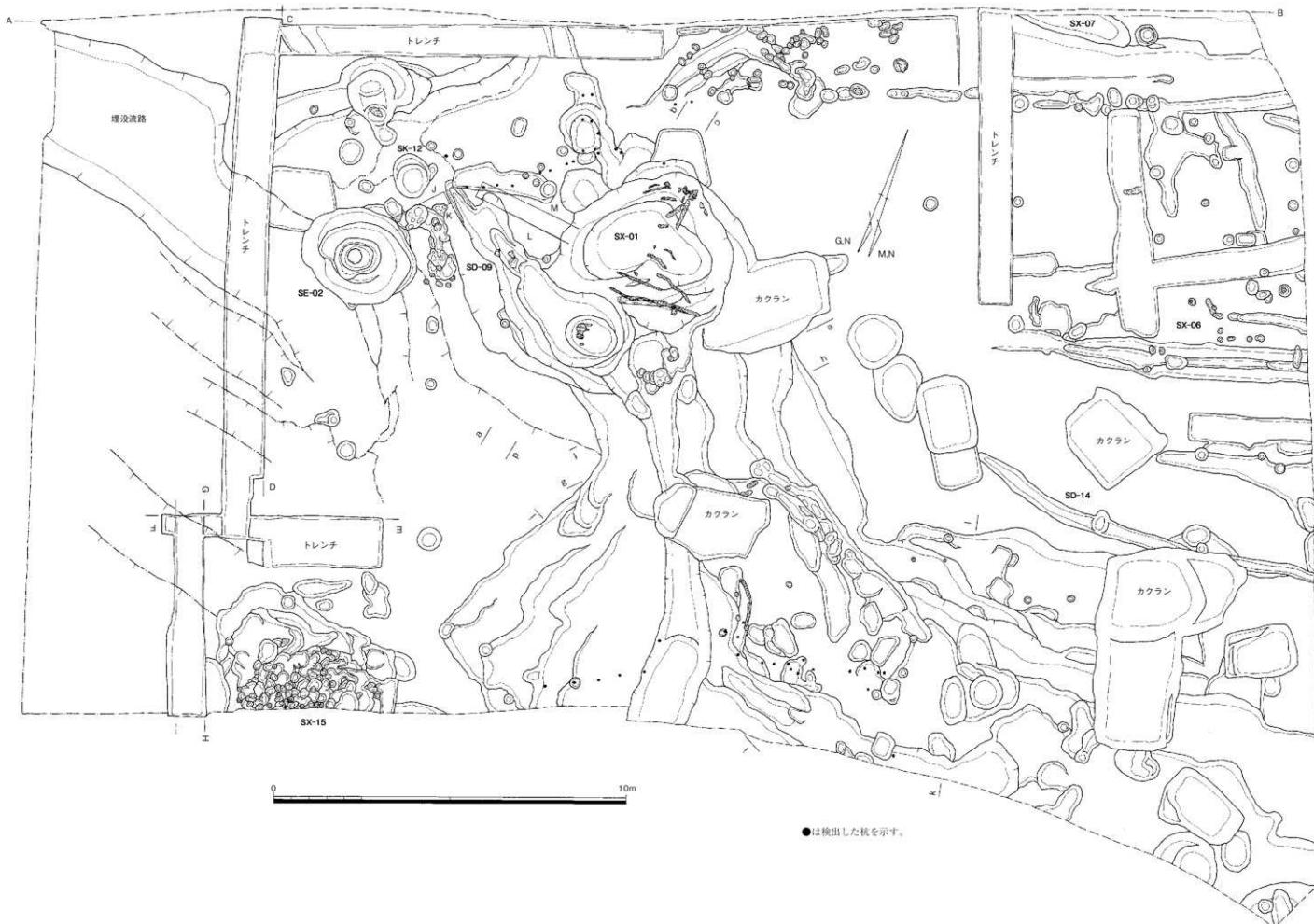


Fig.5 第4次調査地点造構実測図 (S=1/100)

### (三) 遺構と遺物

調査では、弥生時代中期から後期にかけての溜井遺構（SX-01）をはじめ、これに導水する溝状遺構（SD-09）、中世の井戸遺構（SE-02）や不定形土坑（SK-15等）、柱穴群などの遺構を検出した。調査区北側部分はSX-01から流出した黒褐色粘質土の包含層が形成されておりこの他には弥生時代以前の時期と考えられる複数の自然流路等を確認した。

出土遺物は土器・石器類がコンテナケース30箱分出土し、溜井遺構内部よりコンテナケース10箱分の木材・木製品が出土した。出土遺物を列挙すると後期旧石器時代の石器・剥片、縄文時代晚期前葉の深鉢口縁部片・石器や剥片、変成岩の局部磨製石斧、弥生時代中後期の土器群、土師器、5世紀代の須恵器、古代の土師器・須恵器、中世貿易陶磁器・白磁碗・土師器坏等が出土した。この他には葉痕の化石を含有する頁岩等が出土した。

#### SX-01溜井遺構 (Fig.6～8)

調査区中央部で検出した溜井遺構で、検出段階での平面形は南北に延びる長方形が溝で連結するような形状となっていた。南側（上流方向）には溝がとりつき、これが取水溝であることが予想された。遺構内の堆積状況と取水された水の導線を確認するためにトレンチを設定し、土層断面の観察・図化を行った（Fig.7 参照）。掘り下げの結果、溜井遺構は少なくとも4回以上の位置の変更と補修が行われていることが確認された。土層断面図a-bはトレンチ東側壁を図化したものだが、土層観察の結果から安定と流水による堆積層の攪拌が複数回認められる。土層図c-dは同トレンチ西側壁であるが、東側で認められる土層の不整合は確認できず、トレンチを設定した位置付近で流れ込みが収束して貯水部分になっていたと考えられる。土層断面で確認された複数回の遺構使用面を面的に検出す



Ph.7 SX-01全景（南東から）



Ph.8 SX-01遺物出土状況（南東から）



Ph.9 SX-01土層断面（西から）



Ph.10 k-l土層断面（南西から）

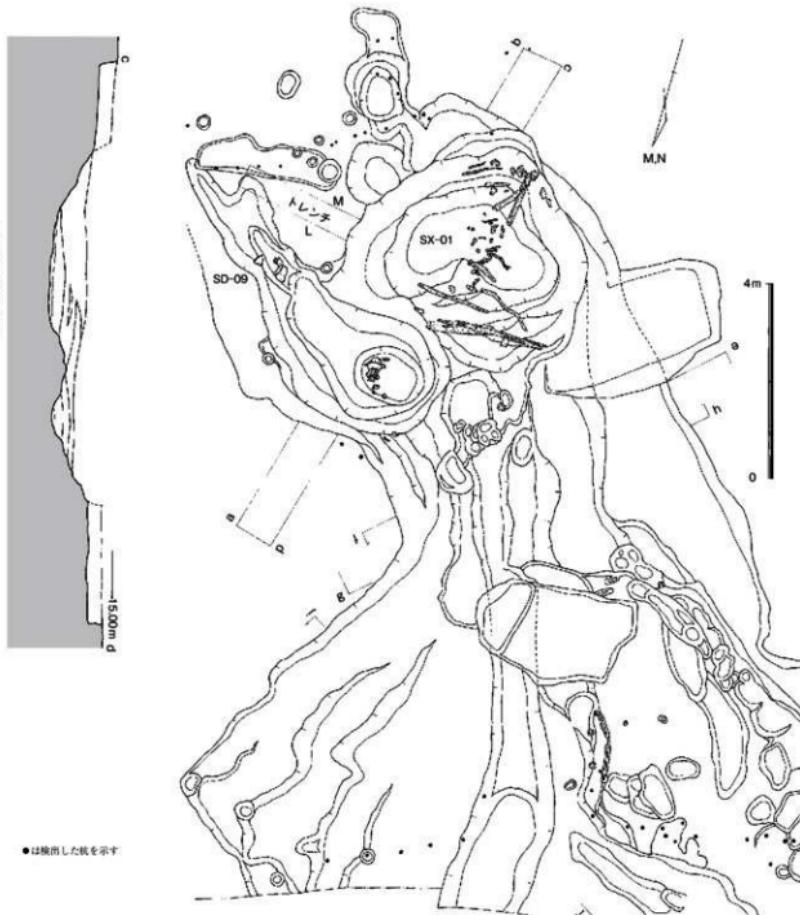


Fig.6 SX-01溜井遺構上層遺構実測図 (S=1/100)

ことを試みたが、間層となる砂層・砂礫層は部分的な堆積であり新しい流水作用で以前の使用面も撥拌されているため、面的な分離が可能であった上層部分と下層部分の二面で平面形の確認を行った。

面的な検出を行った結果、上方の長方形範囲が溜井遺構本体であり、北側部分との間をつなぐ溝状遺構が流出部分であることが確認できた。流量を調整する橈等の施設は検出されないが、流出部には20cm程度の段が設けられており幅も狭まる構造を採る。土層図e-fがこの部分を図化したものである。溜井の東側部分には遺構内部へ水を導水するための溝遺構（SD-09）が付随していた。溝の延長部は流水作用により深く抉られ、内部には完形の複合口縁壺が投げ入れられていた。水辺の祭祀儀礼に伴

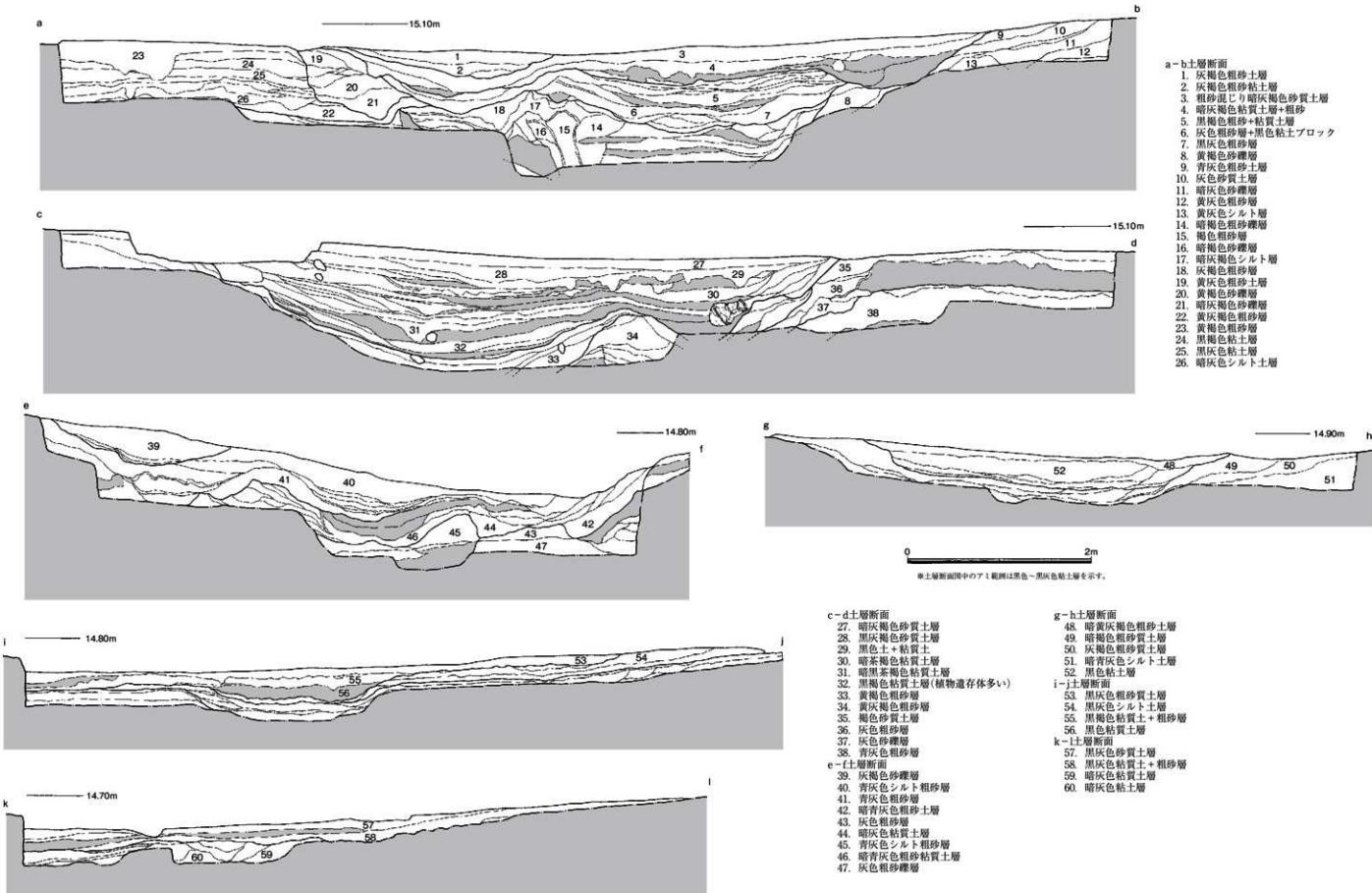


Fig.7 SX-01 潜井遺構土層断面実測図 (S=1/40)

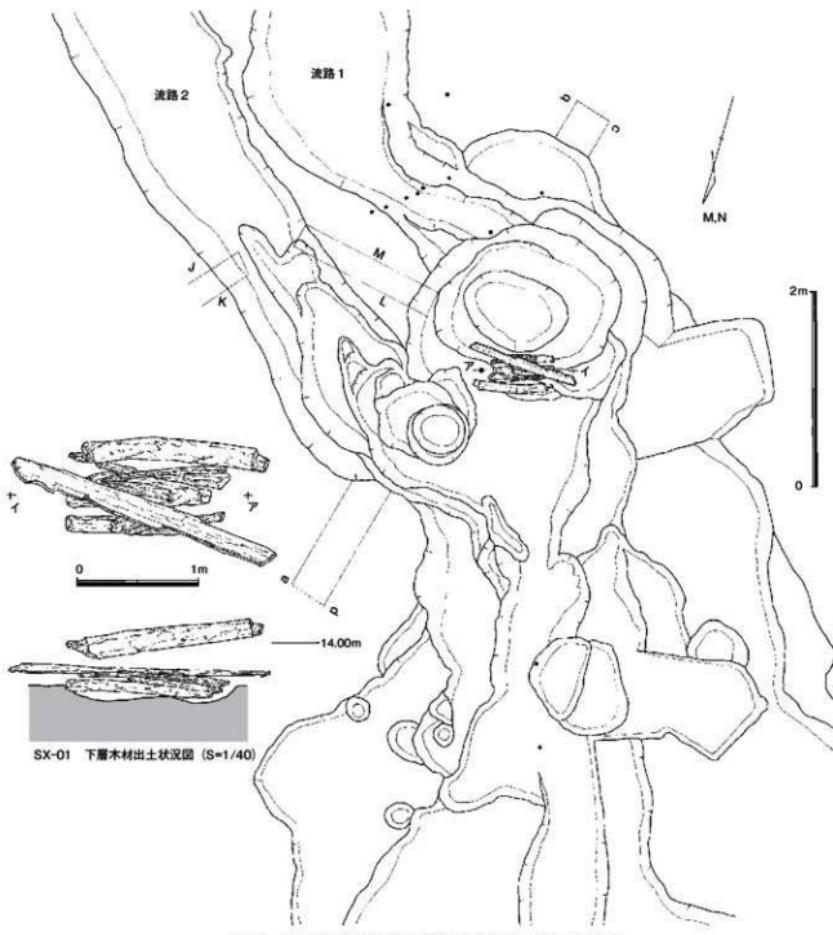


Fig.8 SX-01溜井遺構下層遺構実測図 (S=1/100)

い供獻されたものであろう。遺構内最上層からは木片とともに土器片が集中するが、古墳時代の遺物や古代の須恵器などが弥生土器に混じって出土する。検出段階で遺構上面は大きく削平された状態であったため廃絶時期は特定できないが、溜井遺構としての機能が失われた後も長らく水辺の祭祀が行われる場所として使用され続けていた可能性が考えられた。

溜井遺構の南北側縁部には杭列が各々確認された。それぞれの杭列に伴う柵等の構造体は検出されないが、南側部分は丘陵上部側からの溜井内への異物混入防止のための防護柵に伴うもの、北側杭列は二段目の流量調節用の施設に伴うものであったものか。

下層部分では溜井北側壁部分で木材の集中部分を検出した。壁面の水流による崩壊を防ぐための補強材と考えられ、両側面に固定用の杭痕跡が残る。使用される木材の一部には明瞭な加工痕が残り、建築部材を転用したものであることが分かる。

遺構内からの出土遺物をFig.9～13に示した。Fig.9・10は溜井本体部分からの出土遺物、Fig.11は各トレンチ内出土遺物、Fig.12・13は溜井下流部の黒色粘質土からの出土遺物である。遺物は層位的に取り上げを行ったが、水流により攪拌されており新旧の遺物が存在して出土する。

1は上層から出土した須恵器碗である。2・3は下層から出土したヘラ切りの土師器壺である。4は鉢である。5は短頭壺である。6は上層出土の土師器壺である。7は短頭壺である。8・9は下層出土の土師器壺である。10は複合口縁壺である。SD-09とした導水溝の延長部から出土したもので、祭祀に伴い供獻されたものである。11は下層出土の丹塗りの壺である。12・13は壺である。13は口縁端部に刻み目を有する壺で中層から出土した。14は最下層木材列内から出土した壺である。15～19は壺である。16は最下層木材列中から出土した。15～18は外器面を丹塗りする。19は短い口縁をもつ壺である。20は土師器高坏である。21・22は土師器壺で底部は丸味を帯びた平面となる。22は焼成後に内器面から穿孔する。23・24は複合口縁壺片である。25は壺上半部片である。26・27は土師器壺である。28は瓢形土器胴部片で外器面は丹塗りされる。

29・35は高坏部片である。35は内外器面ともに丹塗りされる。32は土師器高坏部片である。30は壺口縁部片である。31は丹塗りの壺胴部片で突帯が一条巡る。33は下流で設定したトレンチ内から出土した須恵器碗である。34は弥生土器鉢である。内器面には指ナデ痕が残る。36は壺の頭部片である。頭部に突帯を巡らし、内面には指頭圧痕が観察できる。37は瓢形土器胴部片で外器面を丹塗りする。38～40は壺口縁部片である。41は壺頭部片である。42は壺底部片で平底となる。



Ph.11 SX-01上層遺物出土状況（東から）



Ph.12 SX-01下流域検出状況（東から）



Ph.13 SX-01下層木材出土状況（南東から）



Ph.14 出土木材加工部分（西から）

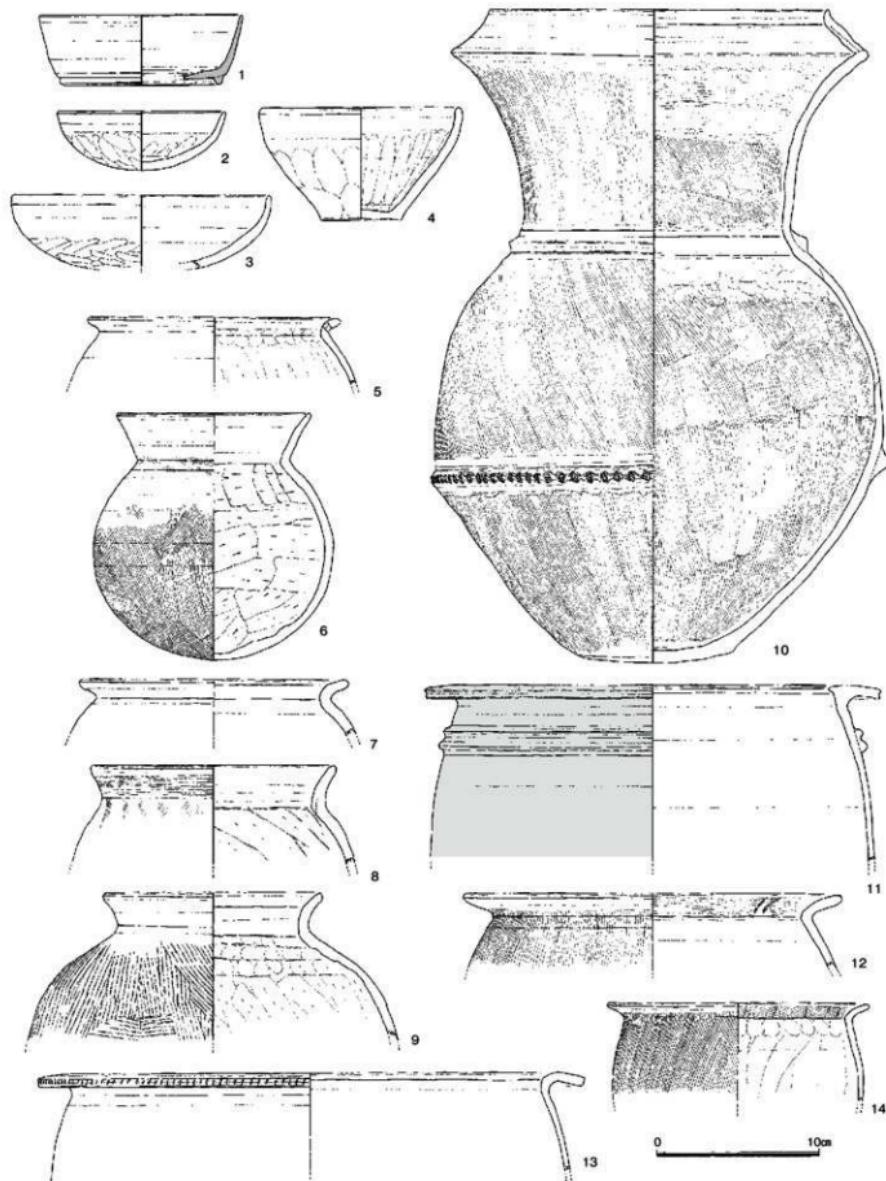


Fig.9 SX-01出土遺物実測図 1 (S=1/3)

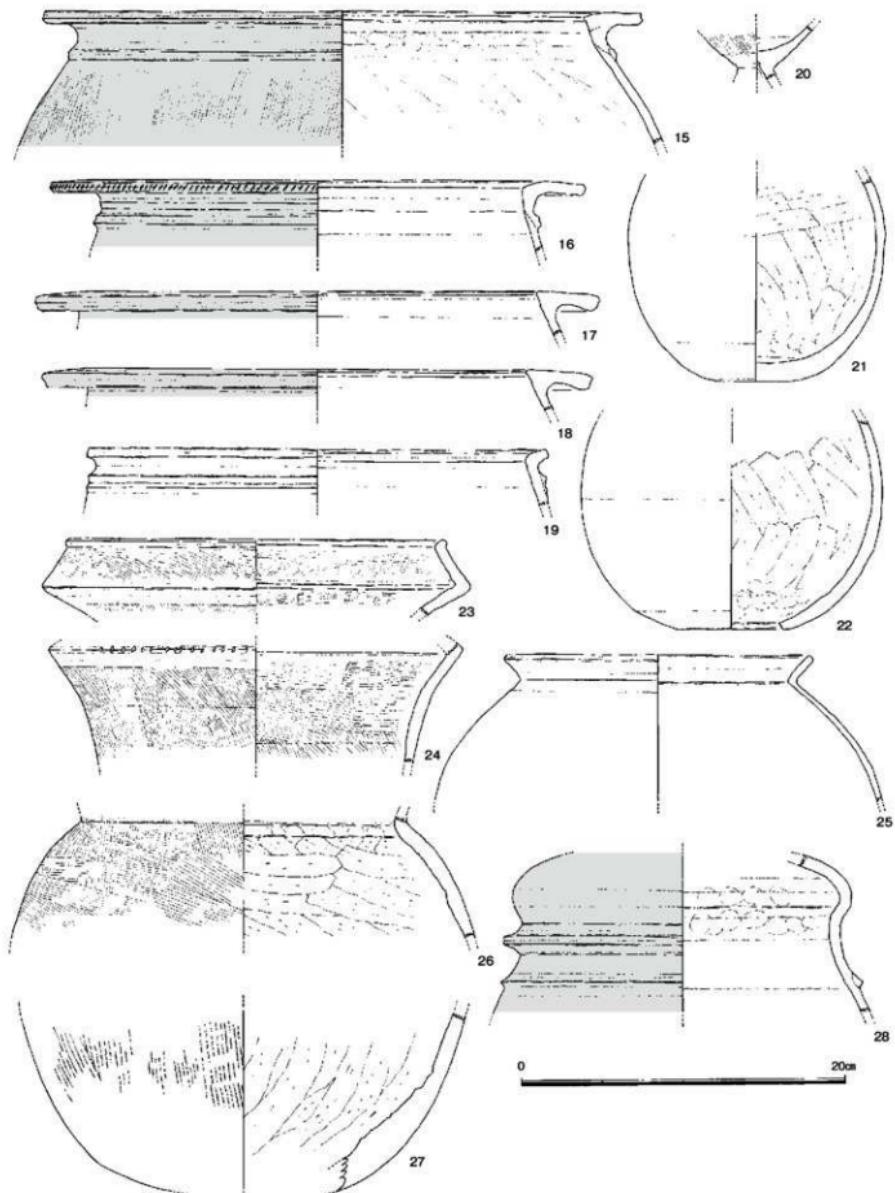


Fig.10 SX-01出土遺物実測図2 (S=1/3)

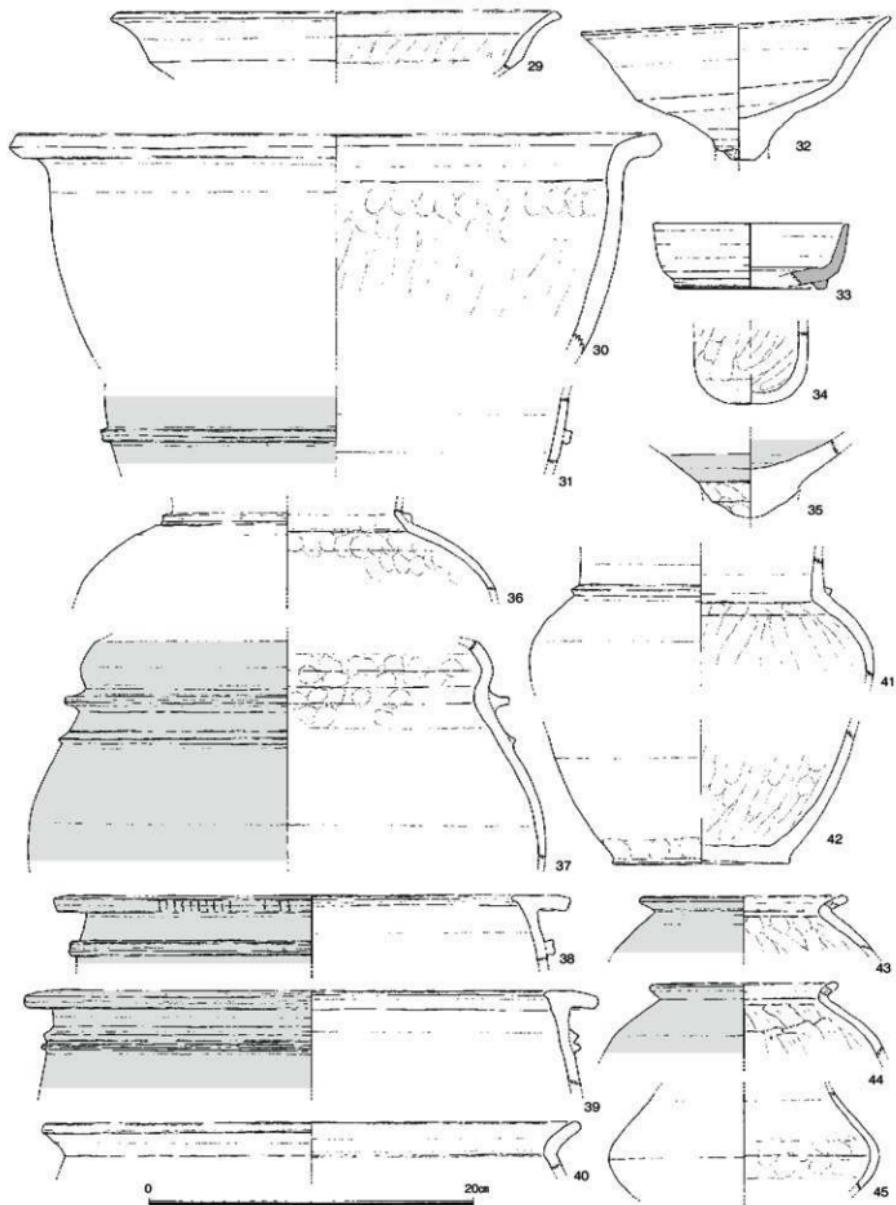


Fig.11 SX-01出土遺物実測図3 (S=1/3)

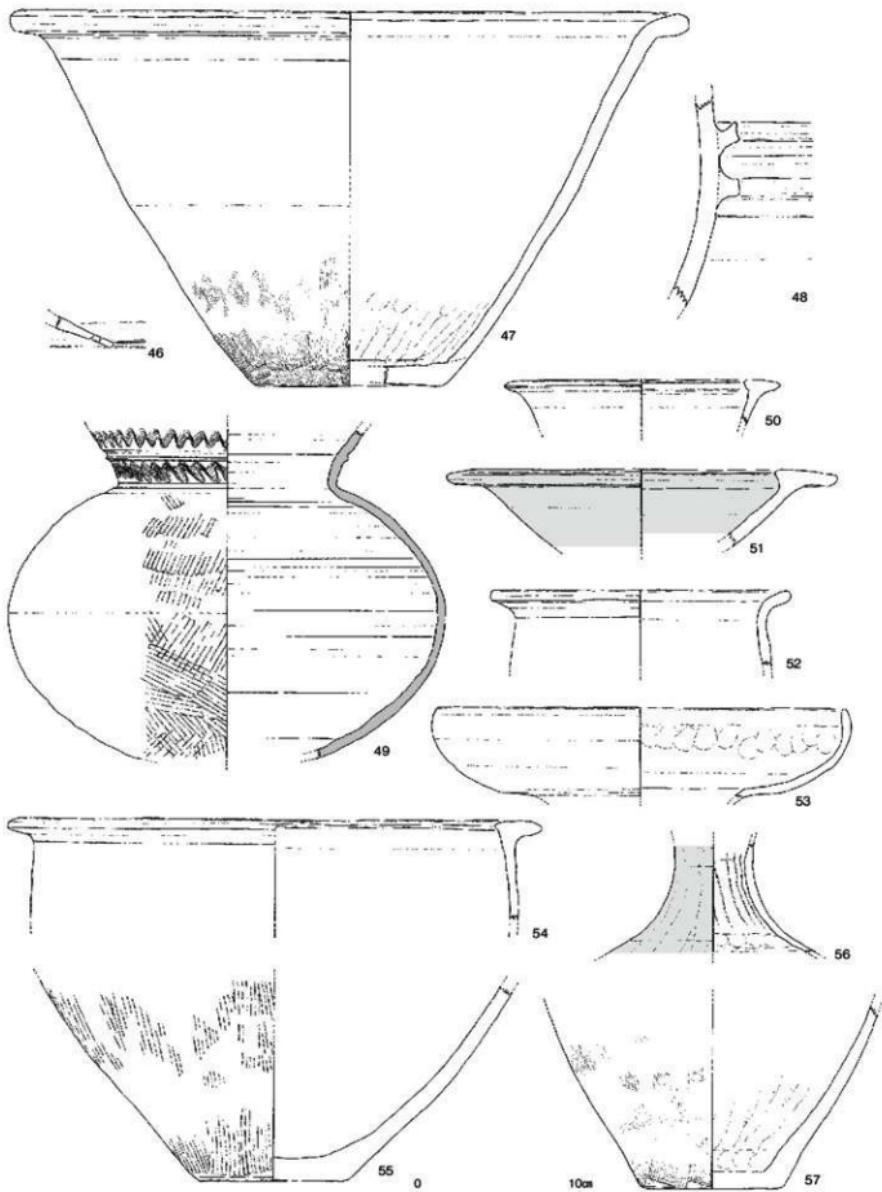


Fig.12 SX-01出土遺物実測図4 (S=1/3)

43~45は短頭壺である。43・44は外器面を丹塗りする。46は弥生土器高坏脚部片である。穿孔は焼成後に行われている。47は鉢である。摩滅のため器面調整の多くは失われるが底部近くに刷毛目調整と指ナデ痕が残る。48は大型の壺胴部片である。突帯が二条巡る。49は須恵器壺である。下流の粘質土層から出土したもので、広範囲に破片が分散していた。50は壺口縁部片である。51は高坏部片で、内外器面に丹塗りを施す。52は下流黒色粘質土層から出土した壺である。53は弥生土器鉢か。内面には指頭圧痕が残る。54は壺口縁部片である。55・57は壺底部片である。56は外器面を丹塗りする高坏脚部片である。58~60はSX-01北側の黒色粘質土層から出土したものである。58は壺口縁部片である。59~60は壺胴部片である。

Fig.13 SX-01出土遺物実測図5 (S=1/3)  
る。49は須恵器壺である。下流の粘質土層から出土したもので、広範囲に破片が分散していた。50は壺口縁部片である。51は高坏部片で、内外器面に丹塗りを施す。52は下流黒色粘質土層から出土した壺である。53は弥生土器鉢か。内面には指頭圧痕が残る。54は壺口縁部片である。55・57は壺底部片である。56は外器面を丹塗りする高坏脚部片である。58~60はSX-01北側の黒色粘質土層から出土したものである。58は壺口縁部片である。59~60は壺胴部片である。

Fig.14にSX-01溜井遺構の簡略な概要図と変遷の推定図を示した。SX-01溜井遺構は、丘陵北側裾部の谷地形との接合点に位置し、南東側の谷間から流入する雨水・湧水などの効率的に貯水するものである。本遺構に蓄えられた水は、温度・水量を調節して北側の水田へと導水された。初期段階の溜

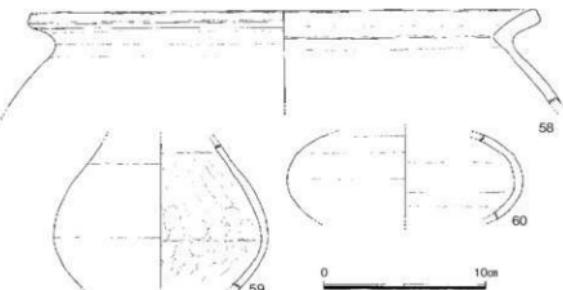


Fig.13 SX-01出土遺物実測図5 (S=1/3)



Fig.14 SX-01溜井遺構流路変遷推定図 (S=1/250)

井は丘陵裾部を巡るように流れていた自然流路上に設置され、次の段階では谷内部寄りの流路を利用して作り直される。水流とともに流入した堆積物により機能が阻害されると、再び裾部寄りの位置に丘陵側を掘削・拡大して整備される。最終段階では谷寄りの位置に導水溝を切り直し、内部の堆積物を浚えて運用を行っていたものと考えられる。北側に設置された流出口は導水部とは異なり一ヵ所に固定されており、大きくては加えられていない。前述したように溜井遺構周辺は造成により大きく削平されているため、実際に使用されていた段階での規模は不明確である。現状で長軸約7.5m×短軸約5.0mの規模であるが、調査区西側での削平の状況から10m×7m前後の規模であったことが推測できる。

#### SD-09 導水遺構 (Fig.15)

SX-01溜井遺構が使用された期間の後半となる後期前半に設置された導水遺構である。掘削箇所は既に埋没していた自然流路上に位置する。導水路下には自然流路内が存在しており、流路内に堆積した砂礫層が透水層となるため調査中も湧水していた。調査で検出した範囲では、幅40cm～15mで長さ4mを測る。溜井本体に向かって底面は35cm程度の高低差が傾斜する。底面には段が存在しており、各段からは供獻土器として投げ入れられた土器群が検出される。溜井遺構と同様に上面は削平を受けているため、使用されていた期間での規模は判然としない。投げ入れられた土器は検出段階では底面全体に広がる状況であったが、下層では二群に大きく分けられたため、取り上げは上流部をA群・下流部をB群として行った。遺物の状況としてはA群とした一群のはうが接合資料が多い。

Fig.16～18に出土遺物を示した。Fig.16には上層部出土遺物を、Fig.17にはA群として取り上げた土器群、Fig.18にはB群の遺物を示した。61～66は壺口縁部片である。61～63は外器面が丹塗りされる。67は丹塗りの短頭壺口縁部片である。68は短頭壺底部片である。69は瓢形土器である。胴部上半



Ph.15 SD-09遺物出土状況（東から）



Ph.16 SD-09遺物出土状況（西から）



Ph.17 SD-09遺物出土状況（北西から）



Ph.18 SD-09出土遺物

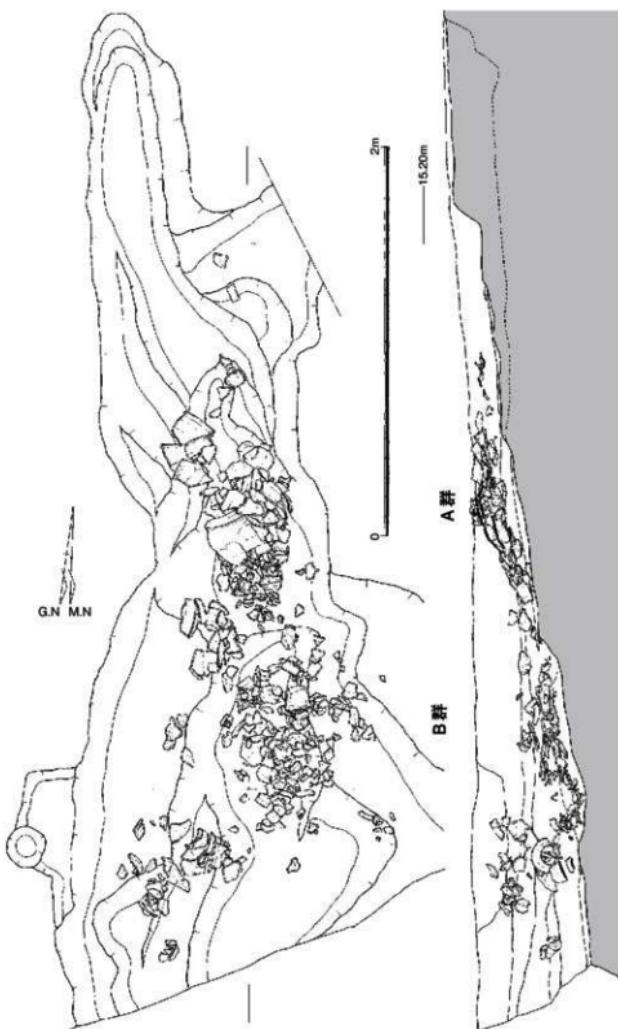


Fig.15 SD-09遺構実測図 (S=1/25)

みを帯びた平底で外器面には刷毛目調整が施される。82は壺上半部片である。83は壺胴部片である。上方への刷毛目調整が施される。84は丹塗りの広口壺である。頸部に突帯を二条巡らせる。外器面に施された丹塗りは大部分が剥落するが、丁寧な器面調整の後に赤色顔料が塗布されたことが分かる。

部に位置し、突帯が一条巡る。70は直立口縁壺で頭部に一条突帯が巡る。71は外反する口縁部を持つ壺の口縁部片である。72は壺底部片、73は壺底部片である。74は丹塗りの鉢である。外表面は丁寧にナデ調整が施され丹塗りされる。75～77は丹塗りの短頭壺である。口縁部鉢に蓋を固定するための穿孔が施される。

78～86はA群として取り上げた土器群である。78は壺である。外器面には刷毛目調整、内器面には指ナデ調整が施される。79は弥生土器壺の底部片である。内器面にナデ調整が施される。80は鉢である。ナデ調整で形成される。81は小型の壺である。底部は丸

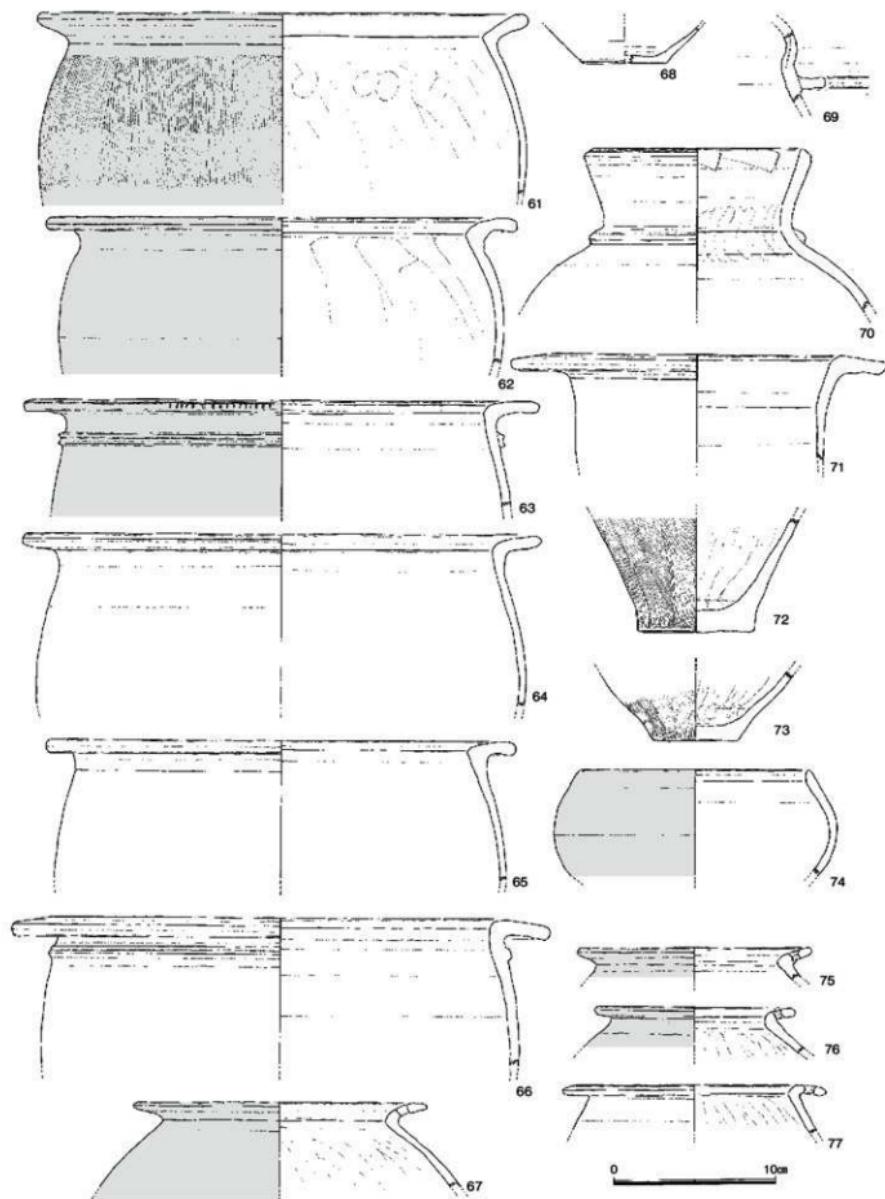


Fig.16 SD-09出土遺物実測図 1 (S=1/3)

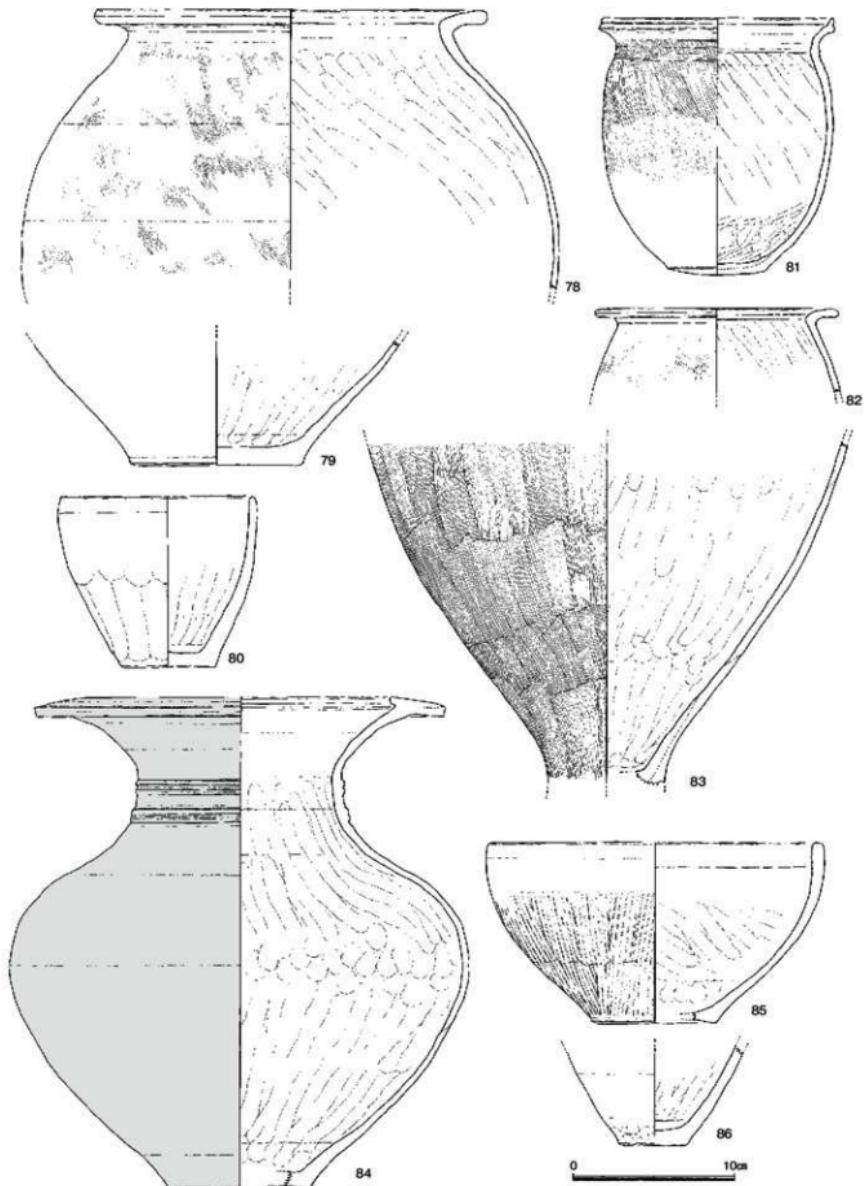


Fig.17 SD-09出土遺物実測図2 (S=1/3)

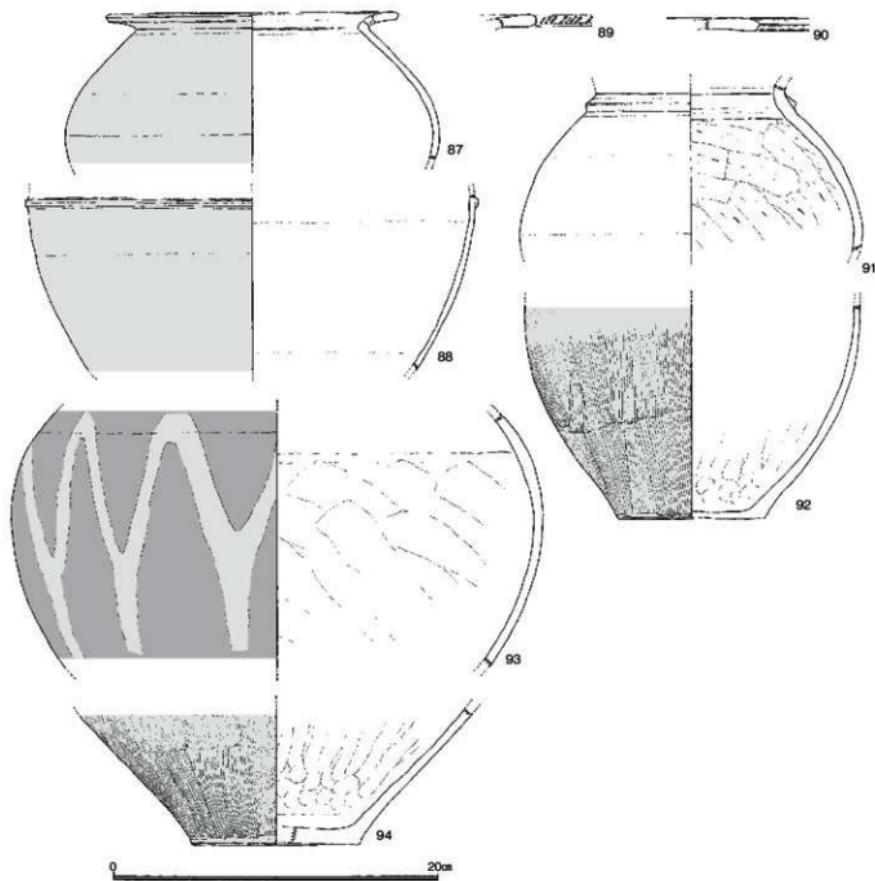


Fig.18 SD-09出土遺物実測図3 (S=1/3・1/4)

85は鉢である。外器面にはやや幅の広い刷毛目調整が施され、内器面には指ナデ痕が残る。86は底部片である。

87~95はB群とした一群である。87は丹塗りの短頸壺上半部片である。88は丹塗りの壺胴部片で残存部分では一条の突帯が巡る。89・90は壺口縁部片である。いずれも丹塗りされた壺の一部である。91は壺頭部片で頭部に一条突帯を巡らせる。92は壺底部片で底面から上方へ向かって刷毛目調整が施される。93は丹塗りの壺胴部片である。外器面にはY字状を連ねた状態で丹塗りが残り、それ以外の範囲が黒色を呈するため当初は意図的に塗り分けした資料の可能性も考えられたが、黒色部分の観察から黒色は顔料の発色ではなく、赤色顔料が剥がれ器面の素地が見えているものであることが分かった。よって運搬時に繩をかけた痕跡であると判断した。同様に網状の痕跡が見られる資料は市内の調査においても出土しているが、本資料に見られる繩の痕跡からは運搬時に掛けられた繩の状態がある程度復元できる。94は壺底部片である。底部より上方への刷毛目調整が施される。95は大型壺の上半部片である。これらの出土遺物は溜井遺構周辺で行われた祭祀行為によって導水部に供献されたものであり、丹塗り土器の含まれる割合が高い。

#### SD-14 (Fig.5)

調査区西側で検出した溝遺構である。検出面では幅30cm前後を測り断面形は逆薄鉢状となる。調査区内では約10m分を検出しただけだが、本来存在していた丘陵地形の裾部を沿うように掘削されたものであることがわかる。溝の底部は北西側に勾配が付けられており、東側はSX-01方向に延びるが削平を受けているため、これに連結していたかは確認できない。溝の埋土中および底面から弥生土器壺片が出土した。本調査区西側の丘陵上には2次調査で確認された集落域が存在しており、今回検出した溜井遺構はこの集落によって設置・管理されていた施設と考えられる。なお、第2次調査地点の遺構面と本調査地点との比高差は現状で3m程度であり、集落範囲から北側に降りた丘陵裾部に水場を設けていた可能性が考えられる。SD-14とした溝遺構はこれに向けて導水した遺構と考えられる。なお、調査区西側部分では旧来の地形を反映している等高線が見られ、本遺構の延長部分も丘陵裾部である標高16m付近の地形に沿うように西側に延伸するものと考えられる。

出土遺物をFig.19に示した。96・97は弥生土器の壺口縁部片である。98は溝埋土の上面から出土した須恵器壺口縁部片である。99は弥生土器壺底部片である。この他には弥生土器壺の胴部片などが出土した。

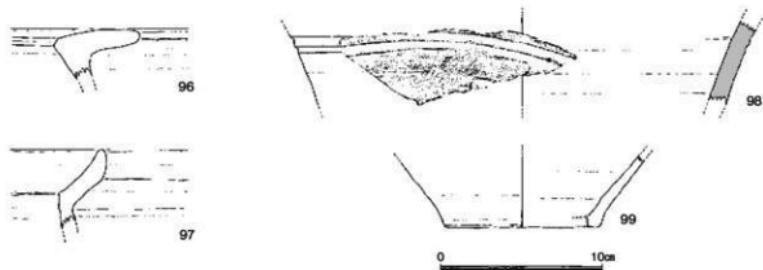


Fig.19 SD-14出土遺物実測図 (S=1/3)

### SE-02井戸遺構 (Fig.20)

調査区南東側で検出した井戸遺構である。検出面での平面形は長軸3.2mの楕円形を呈し、検出面の標高は15.10m前後を測る。埋没した自然流路上に掘削された井戸であり、當時使用に耐えうる水量が確保されたものと考えられる。検出面から20cm程度の深さで段を有し、更に20cm程度掘り下げた地点で直径1.2m前後の堀方となる。上面から見ると反時計回りに掘削深度が深くなる。この二段目の堀方は深さ1m前後を測り、堀方底面のやや東寄りの部位に曲げ物を据えて井筒と使用する。使用される曲げ物は直径41.6cm、器高25.8cmを測る。上

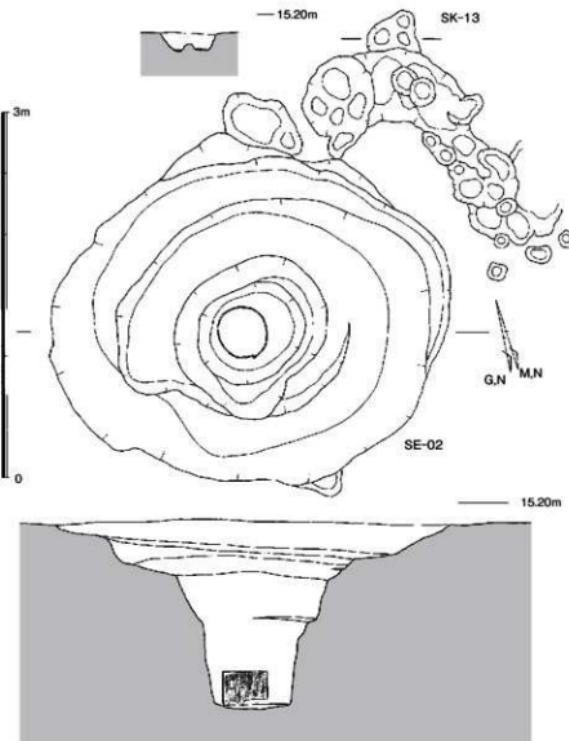


Fig.20 SE-02遺構実測図 (S=1/40)

下端部の一部が破損するがほぼ完存する。井戸遺構は前述のように埋没した自然流路上に掘削されており、40cm前後堆積した黒色粘質土層を掘り抜いて下層に堆積する透水層である青灰色砂質土層まで達していた。

埋土上層部からは、弥生土器や土師器・須恵器等の細片が出土した。これらの遺物は、井戸廃絶に伴い埋め戻された土中に含まれていたものである。埋土下層中および井筒として据えられていた曲げ物内からはヘラ切りされた底部を持つ土師器壺・黒色土器・白磁碗などの遺物が出土した。

出土遺物をFig.21・22に示した。

100は黒色土器の壺である。内面に炭素を吸着させた内黒の壺である。101は白磁碗である。外器面は体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。102はヘラ切りされた底部を持つ土師器壺である。

103は井筒に転用された曲げ物である。やや大型の曲げ物で底板は井筒に転用する際に取り除かれていた。曲げ物の下端部には底板

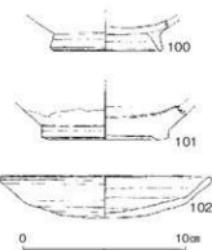


Fig.21 SE-02出土遺物実測図  
1 (S=1/3)

を固定するための目釘の穴が約8cmの等間隔で穿孔されていた。内面には板を円形に曲げるために密な切り込みがなされている。切り込みは主に縦方向に行われているが、上部では格子状に斜め方向の切り込みが入る。

これらの出土遺物からSE-02とした井戸遺構は中世前半の12世紀前半の時期に属するものと考えられる。本調査ではこの井戸遺構以外に中世の時期となる遺構の検出は

なく、中世の段階でどのような遺構群が周辺に展開していたかは不明確である。隣接する第2次調査地点では、中世前半期の溝遺構や瓦器焼成遺構等に加えて掘立柱建物に構成される小規模な集落が存在していたことが想定されており、本調査で検出した井戸遺構もこの集落に属するものと考えられる。この井戸遺構に関連するような掘立柱建物などの遺構は、削平を受けているためか検出されていないが、本来は本調査区内にも屋敷地等が展開していたものと考えられる。なお、近隣で確認されている稻居塚城に関連する遺構や遺物の検出は、本調査区内では確認できなかった。

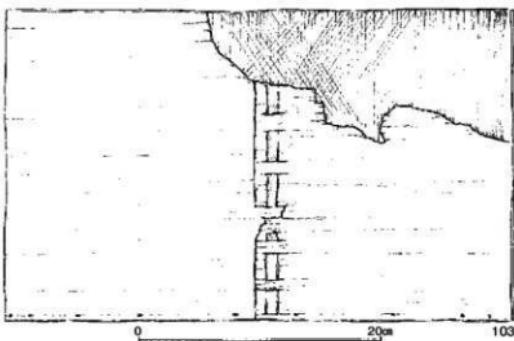
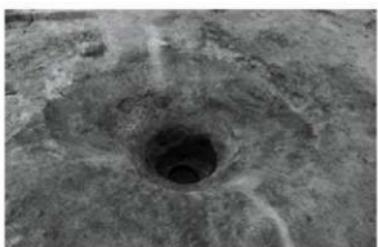


Fig.22 SE-02出土遺物実測図2 (S=1/4)



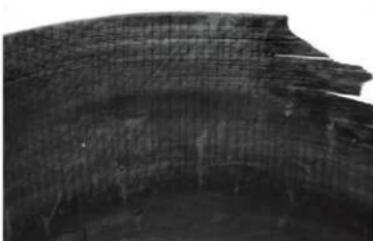
Ph.19 SE-02検出状況 (南から)



Ph.20 SE-02出土曲げ物



Ph.21 SE-02出土曲げ物・留め部



Ph.22 SE-02出土曲げ物・内面

### その他の遺構

これまでに主要な遺構と遺物の説明を行ったが、この他にもわずかながら遺物が出土する遺構が検出されているので、以下に説明を行う。なお、上月隈遺跡周辺の遺跡では主に弥生時代の墳墓遺跡の検出例は多く報告されているが古代から中世段階にかけての遺構は点在する程度である。月隈丘陵西側には主要官道とは異なるルートの道路が設置されている可能性が報告されており、上月隈遺跡南側の立花寺遺跡では官衙関連施設の存在も想定されている。しかしながら丘陵西側部分の地形変化は広範囲かつ大規模であり、これらの遺構群は既に削平され消滅している可能性も考えられる。

### SK-12 (Fig.23)

調査区南東側で検出した土坑である。検出面の標高は15.10m付近で、平面形は橢円形を呈する。長軸1.2m×短軸1.0mを測り、検出面から土坑底面までは60cmの深さを測る。遺構内南側には段を有する。埋土は灰色シルトを多く含む暗褐色粘質土で、土器の細片がわずかに出土した。

土坑西側に接して小土坑があり、この土坑との切り合い部分から弥生土器壺の底部片が逆位の状態で出土した。

出土遺物をFig.24に示した。104は弥生土器壺底部片である。底部はほぼ平底で、外器面には継位の刷毛目調整が残る。内器面には指頭圧痕と指ナデ痕が残る。

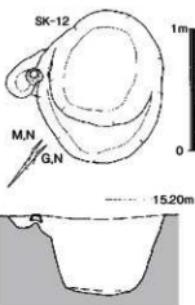


Fig.23 SK-12 遺構実測図  
(S=1/40)

### SK-13 (Fig.20)

調査区南東側で検出した土坑である。SE-02南側で検出された不定形連続土坑に切られる土坑で、長軸40cm前後を測る。土坑底面には凹凸が見られ、埋土は粗砂を多く含む暗灰褐色粘質土である。埋土中から土器片が数点出土した。

Fig.24に出土遺物を示した。105は黒色土器である。外面に炭素を吸着させたもので内面は暗灰色を呈する。遺構としては不明確であるが、本調査区内にも古代の遺構・遺物が存在していたことが分かる。

### SX-07造成土 (Fig.5)

調査区西端部で検出した造成土の範囲で、明確な範囲が不明確。造成に際して削り残された遺構の埋土の可能性が考えられたため掘り下げを行ったが、底面では何も検出されなかった。調査区全体の地形復元から、早い段階でこの付近は削平を受けていることが判明したため他の地点から持ち込まれた盛り土内に遺物が混入していたものと判断される。埋土中から弥生土器・須恵器などの破片が出土した。

出土遺物をFig.25に示した。106は弥生土器壺底部片である。107は須恵器壺頭部片である。二条の沈線が巡り、格子状の沈線文が見られる。108は須恵器胴部片である。

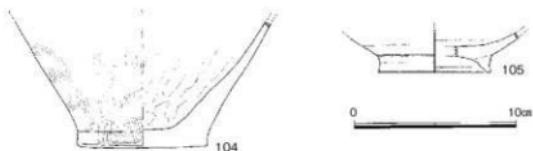


Fig.24 SK-13・SK-12出土遺物実測図 (S=1/3)

である。内器面には同心円文の工具痕が残り、外器面には斜格子状に叩き目が見られる。

#### SK-06 (Fig.5)

調査区西側で検出したもので、明確な平面形は捉えることはできない不定形土坑かSX-07と同様の整地土層である。この周辺は暗黄褐色砂質土層面が遺構面であるが、厚さ10cm前後の暗灰色粘質土が攪乱に切られる状態で残っていた。この粘質土を掘り下げても柱穴等の遺構は確認できなかった。

出土遺物をFig.26に示した。109は近世磁器の皿である。110は弥生土器甕の底部片である。

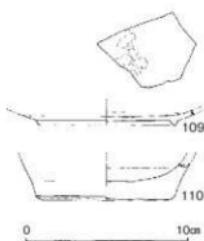


Fig.26 SK-06出土遺物実測図  
(S=1/3)

#### SX-15 (Fig.5)

調査区北東部で検出した不定形の土坑である。遺構の南側のみを検出し北側は調査区外へ伸びるため全容は未確認である。現状では4m×3mの範囲に径10~15cm前後の不定形の凹凸が激しく集中する。この凹凸内は灰色粗砂が底面に堆積し、上層には粗砂を多く含む黒色粘質土が堆積する。これらの凹凸は足跡の集合体である可能性があり、水田遺構に伴う施設の性格が考えられた。凹凸内には指の痕跡などは見られない。埋土内からは土器片は出土しないため遺構の時期は確認できないが、遺構内西側からFig.31-22で示した磨製石斧が出土した。遺構の状況や埋土の観察から弥生時代に属する遺構と考えられる。

#### その他の遺物 (Fig.27)

この他にも調査区内の堆積状況を確認するために調査区北東側で設定したトレーニチ内から遺物が出土しており、以下で報告を行う。111は弥生土器である。112は縄文土器深鉢頭部片である。内外面には横位のヘラ磨きが密に施され、色調は暗褐色を呈する。晩期前半に位置づけられる広田式の範疇に含まれるものか。摩滅されておらず近接した箇所から流入したと考えられる。

#### 石器 (Fig.28~31)

本調査では約140点の石器・石材が出土した (Tab.1 石器一覧表参照)。出土した遺物の多くが黒曜石破片・剥片である。なお、一覧表の作成にあたっては埋蔵文化財第2課の吉留秀敏の協力を得た。

1は搔器である。頁岩もしくは流紋岩製の石器で縄文時代草創期以前に位置づけられる。2は細石刃か。3は先端部を欠損する開脚鋸歯鋸である。4はサヌカイト製の縦長剥片素材を使用したスクレーパーである。5は黒曜石縦長剥片で縄文時代草創期以前に位置

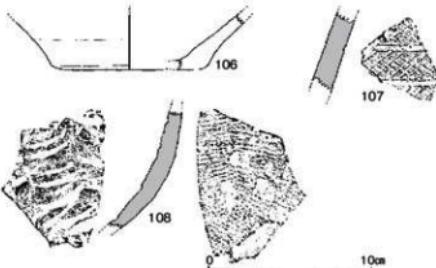


Fig.25 SX-07出土遺物実測図 (S=1/3)

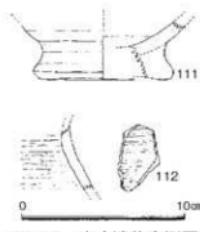


Fig.27 出土遺物実測図  
(S=1/3)

づけられる。6はくさび形石器で縄文時代早期以前の時期が考えられる。使用される石材は姫島産の黒曜石である。7は早期以前の剥片石器である。8はサスカイト製の使用痕を有する剥片である。9は縦長剥片である。10は縄文時代後期前後に位置づけられる剥片鎌である。11は石鎌である。五角形の平面形を持ち開脚した脚部を持つ。12は石鎌である。13は剥片石器である。14は二次調整剥片である。15はサスカイト製の剥片石器である。

16はくさび形石器である。17は三角錐の未製品である。18はくさび形石核である。本地域の縄文時代晩期～弥生時代前期に特徴的に現れる型式で両極技法による剥片剥離形態が見られる。19は剥片石器である。刃部に微細剥離が観察できる。

20は剥片石器である。姫島産黒曜石が用いられる。21は石核である。多面体石核で、縄文時代後晩期に位置づけられる鉛桶技法の残存形態と見られる。

22はSX-15とした不定形土坑から出土した変成岩製の磨製石斧である。研磨痕がみられるが実用品としての強度はなく水稲耕作に関する儀器か。23は滑石型の紡錘車である。24は石臼である。

Ph.24には頁岩剥離面に見られる広葉樹の化石を示した。大振りの頁岩で周辺部は風化が進む。この

#### 上月隈遺跡第4次調査出土石器観察表



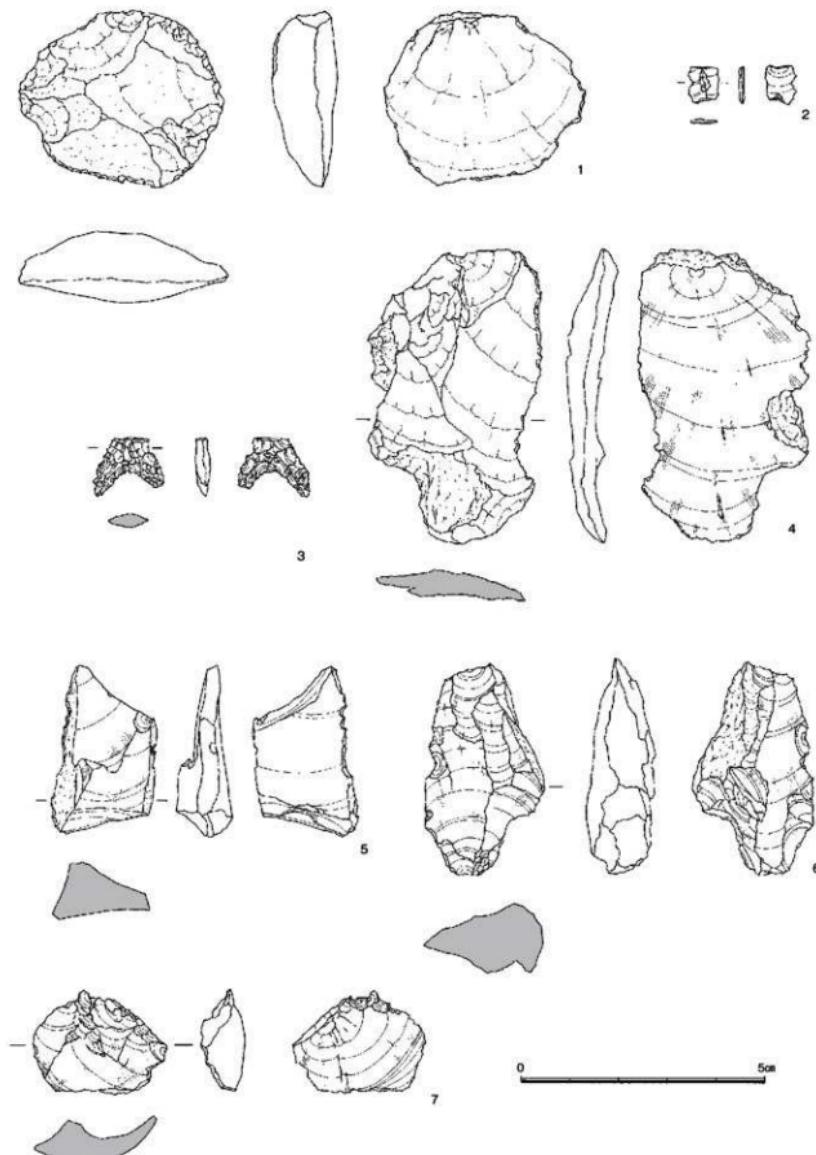


Fig.28 出土石器実測図 1 (S=1/1)

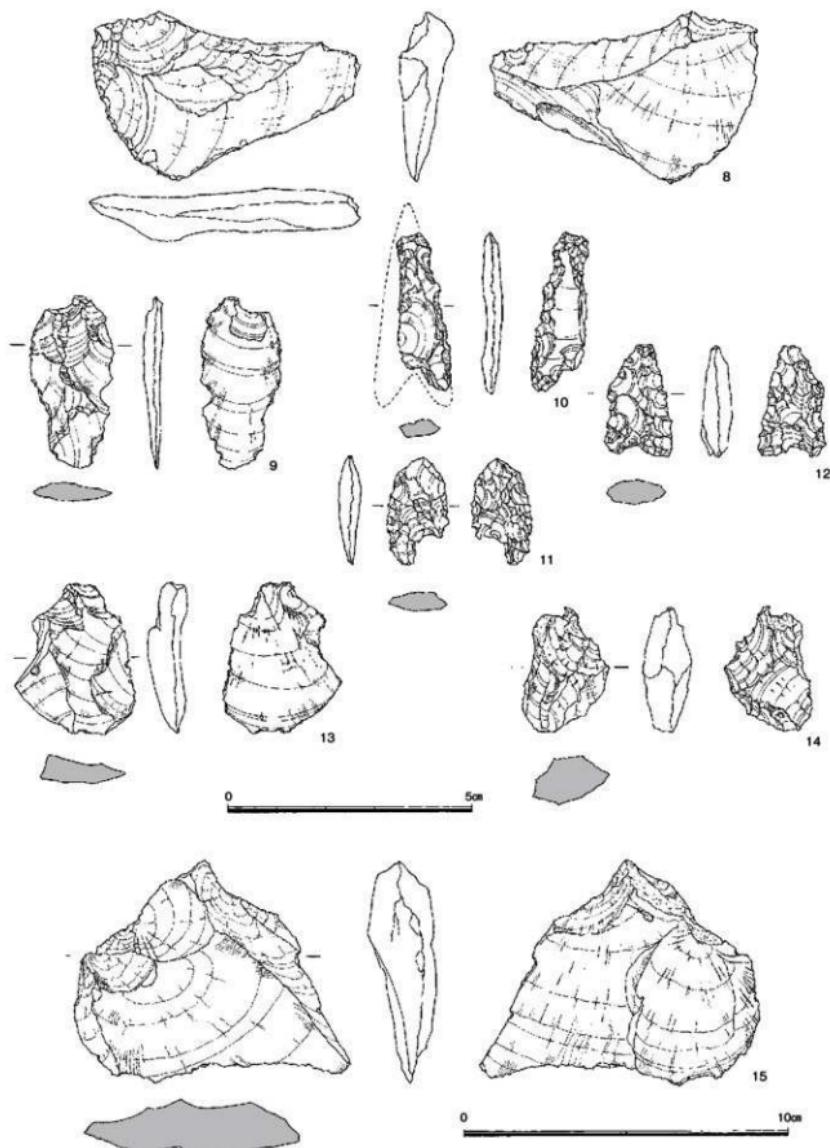


Fig.29 出土石器実測図 2 (S=1/1・2/3)

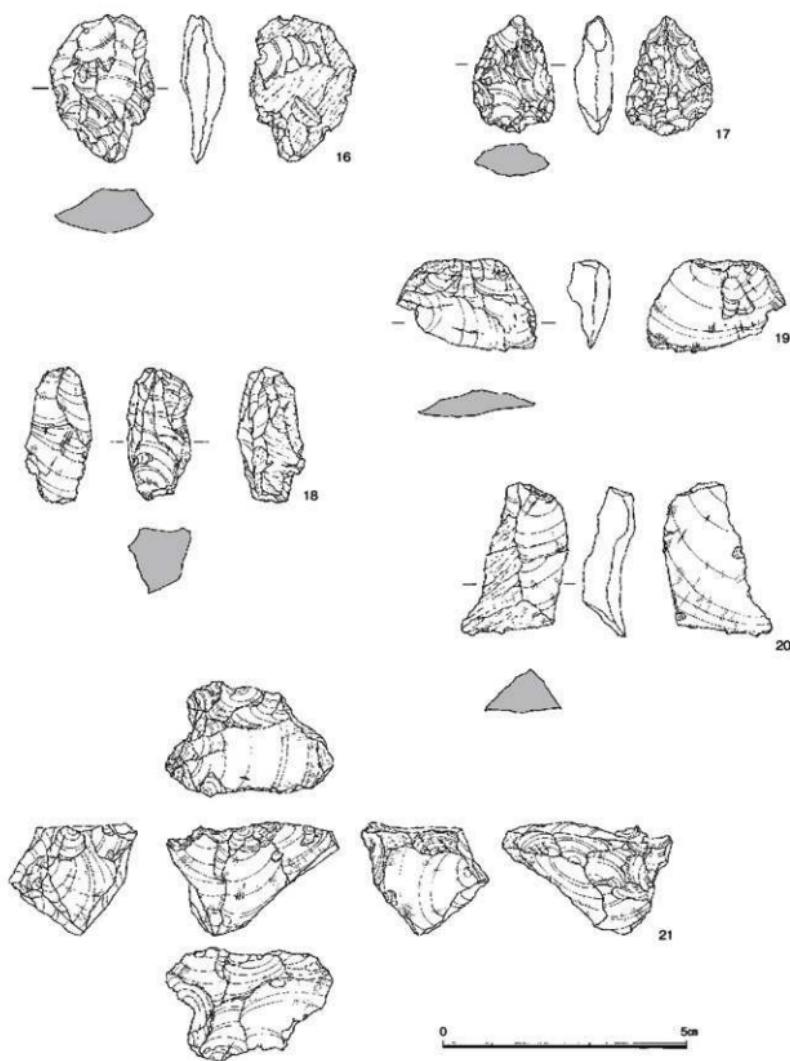
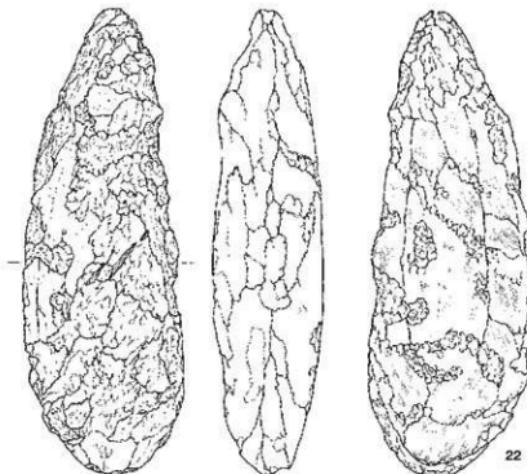
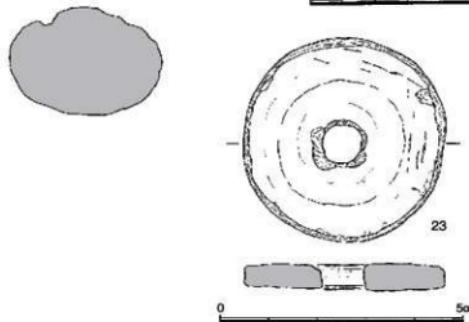


Fig.30 出土石器実測図3 (S=1/1)



Ph.23 SX-15出土遺物・  
磨製石斧



Ph.24 化石入り頁岩

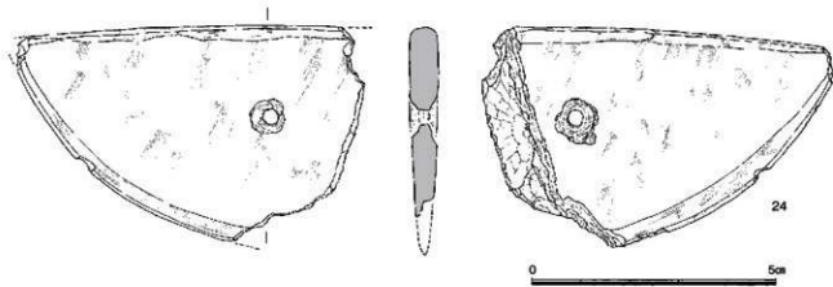


Fig.31 出土石器実測図 4 (S=1/1·2/3)

ような頁岩は月隈丘陵周辺では採掘・採取される箇所は知られておらず、石器素材として彼の地より持ち込まれたものと考えられる。平坦面を砥石として使用した可能性も考えられる。

今回出土した石器類の多くが縄文時代晚期から弥生時代前期に位置づけられるものであるが、本調査ではこの時期に該当する遺構は検出されていない。また、多くがSX-01溜井遺構下流に位置する包含層や調査区内で検出された自然流路内の堆積層から出土しており、調査区南東側に該期の遺構群が存在していたことが推測できる。

### 第三章 <まとめ>

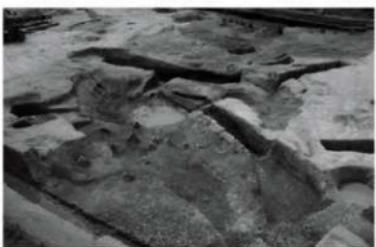
以上簡単ではあるが、検出遺構、出土遺物についての説明を行ってきた。最後に上月隈遺跡第4次調査のまとめを行い、調査成果より弥生時代の遺跡内における土地利用の方法について検討を行う。

発掘調査では、弥生時代中期後半から後期前半にかけて存続した溜井遺構を検出し、月隈丘陵西側に広がる平野部ではなく狭い谷間地を効率的に開発し、空間利用を行っていたことが判明した。また、調査区内では遺構自体は確認できなかったが、出土遺物から縁辺部にも後期旧石器時代から縄文時代にかけての集落・散布地が存在することが確認できた。古墳時代から古代にかけては顕著な生活遺構は検出されないが、水に対する祭祀行為が継続的に行われている。中世段階では削平のため規模は確定できないが井戸遺構が作られ集落の範囲に取り込まれていることが確認できた。

#### 1. 溜井遺構について

本調査で検出した溜井遺構は弥生時代中期後半から後期前半にかけて使用が継続されたものである。この時期には他の遺跡においても同様な溜井遺構が構築・維持管理されている。東区三苦遺跡第5次調査や三苦永浦遺跡などの丘陵上に展開する該期の遺跡内で複数の類例が知られている。これらの遺跡では、ほぼ同時期に谷間地等を変更して溜井遺構を構築し水の確保し維持管理に苦心している。このような遠く離れた複数の地点で、同時性を持って同様な遺構を構築する背景には、社会的な環境や気候環境の変動などに起因する様々な要因が考えられる。月隈丘陵に展開する他の遺跡群の動向からも、中期からの大規模な墓域造営や集落検出例の増加などに裏付けられる活発な活動が知られている。丘陵部以外の遺跡においても、この時期前後にかけて大規模な水田開発が行われ集落構造にも変化が起こっていることが確認されている。人口増加や社会的環境の変化により活動域が拡大・分散し、丘陵上部への進出・開発が活発化したものと考えられる。

本調査で検出した溜井遺構は、埋没した自然流路を巧みに利用して水の確保を行っており比較的小



Ph.25 SX-01下自然流路検出状況（南東から）



Ph.26 調査区東側自然流路検出状況（南西から）

規模単位の集団により構築・維持管理されたものと考えられる。溜井が付属する水田遺構は北側の調査区外に求められるため、規模や構造については今後の調査を待たねばならない。

調査で検出した溜井遺構は上部を大きく削平されていたため、約7.5m×5.0mの範囲しか把握できなかったが、調査期間中も透水層からわき出る湧水により常に帶水していた。周辺の削平状況から推定される本来の規模であれば2000L以上の水量を貯水することが可能であり、生活用水や灌漑用水としての使用にも充分に耐えうる量であったことが推測される。

溜井遺構への導水部（SD-09）から出土した縄目の痕跡が見られる丹塗り土器は、該期の土器の運搬方法について示唆を与えてくれる。縄に接していた箇所には鮮明に丹塗りが観察されるが、それ以外の範囲には埋没時に鉄分が付着し違いを明確に見せる。器面観察からは使用された縄の種類や形状は確認できないが、格子状に編んだ縄袋状の形状であったことがわかる。また、土器の運搬に際して使用されたと同時に供獻する際にもこれを外さずに行っている点にも注目される。

## 2. 上月隈遺跡内での土地利用について

Fig.32に第4次調査近辺で実施された第1次・第2次調査地点の位置を示した。第1次調査は東西に延びる上月隈丘陵中程の標高30m前後の地点に位置し、大きく削平を受けているが弥生時代中期後半から後期前半にかけての墳墓群が検出されている。第2次調査は第1次調査の北側で実施され同時

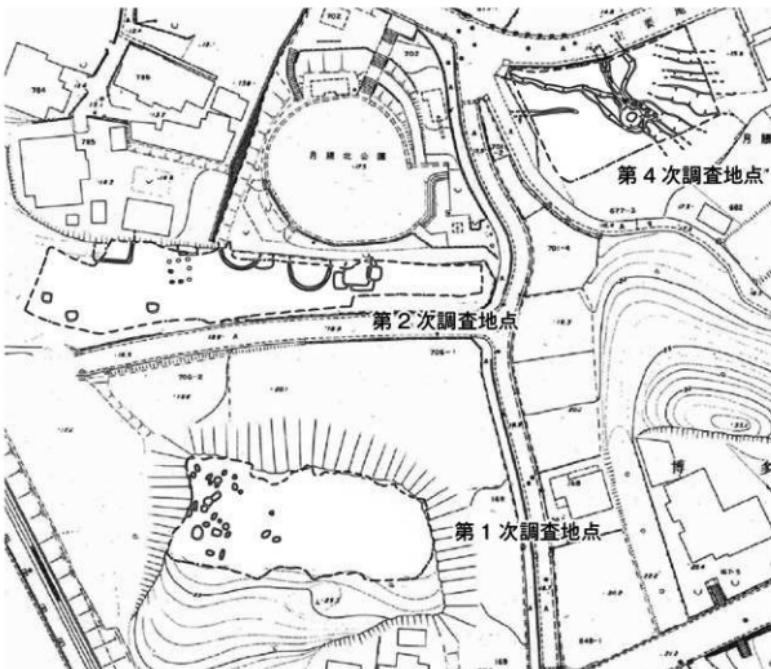


Fig.32 月隈遺跡内調査地点位置図 (S=1/1,000)

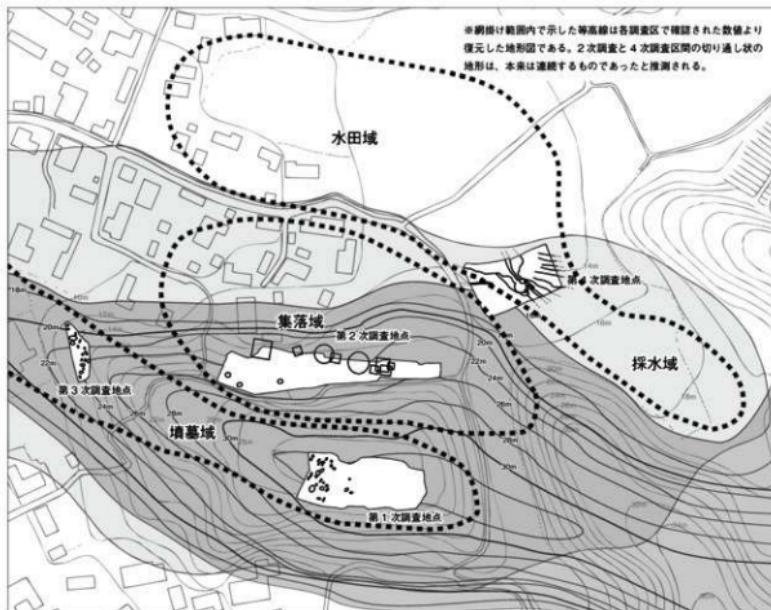


Fig.33 月隈遺跡内遺構復元図 (S=1/2,000)

期の集落を検出している。第2次調査地点は丘陵北側斜面上に位置しており、丘陵頂部を含む尾根線上が墳墓域として利用され、これを取り囲むように集落が広がっていたことが推測できる。

Fig.33には第1次から第4次までの調査区とこれらの成果から推定できる集落・墳墓の位置関係を示した。第1次調査と第3次調査を結ぶ丘陵尾根線上には、壺棺墓や土坑墓から構成される墳墓域が存在する。この墓域はこれまでの調査成果より長さ150m前後の範囲に広がるものと推定されており、墓域の西側端部付近に位置する第3次調査では研ぎ分けを持つ中細型銅剣が副葬された壺棺墓が検出されている。この墓域を見上げる形で丘陵北側斜面上に堅穴住居・溝で構成される集落が展開し、これより低い丘陵裾部から谷地形内に水田などの生活基盤を支える生産遺構や水利遺構を配置する。この想定図からは集落・墳墓・生産遺構が150~200mの範囲内に収まることが考えられ、小規模でありながら完結した集落の姿を復元することができる。本調査で検出した溜井遺構は、この集団により管理された水利施設であり同時に祭祀の場であったと考えられる。現在も月隈丘陵の各所に点在する貯水池は、このような遺構の名残を残すものである可能性が考えられる。

月隈丘陵西側の各支丘上に点在する墳墓群にも、上月限遺跡と同様に小規模単位の集落と生産遺構という構造が存在していることは容易に推定され、各支丘の可視領域内に複数の小集落が営まれていたのであろう。これらの小規模集落を統括していたのは大型掘立柱建物をもつ久保園遺跡や席田大谷遺跡等の拠点的集落であったと考えられる。各集落では青銅器生産などの手工業も行っており、各集落に求められる性格は各々異なるものであったのであろう。これらの統括された小集落集団は、出土する青銅器から須玖岡本遺跡に王墓をもつ奴国の強い影響下にあったと考えられている。

## 付論 稲居塚城の縄張りについて

山崎 龍雄

### 1 はじめに

稲居塚城は博多区内に所在する山城である。博多区には二か所の山城があり（註①）、いずれも福岡空港東側の月隈丘陵上に立地する。もう一つの山城、席田青木城は二度行われた調査ではほぼ消滅したので（註②）、区内ではほぼ全城が残存する唯一の城である。今回紹介する山城の縄張り図は中西義昌氏によって作成されているが（註③）、筆者が現地を見るとまだ不十分であると思われたので、平成22年4月17日～7月10日までの土日・祝日を利用して縄張り図を作成した。本図も平成22年段階のものである。

### 2 稲居塚城の立地と歴史的背景

稲居塚城は博多区上月隈に所在する山城で、江戸時代の『筑前国統風土記』では立花城の端城で城主に安河内筑前守とか戸次郎兵衛がいたと、『筑前国統風土記拾遺』では天正年間は安河内筑前守か光安筑後守、又は隈本筑後守が城主であったと記述されているが、詳細は不明である。光安氏は在地勢力であったようで、現在も地元に光安姓の方が残る。大友氏旧家臣であった宮崎座主城戸清隆が、元和元年（1616）に記した『豊前覚書』の天正六年（1578）の立花城に関する記事に席田郷党の名前が見え、この地域が立花氏の勢力下にあったことが分かる。また天正八年（1580）には立花城主戸次道雪が自ら出向き、月隈村一貫古野山に「蓮田切寄せ」の築造を指示したおりの記事に光安筑後守の名が記されている。宮崎宮座主方清に「蓮田切寄せ」在番を申しつけたが、人手が足らないということで「蓮田拾人（原文、給人の間違いか？）」に任せ、高木玄勝が派遣されている。古野山の所在地は不明であるが、この稲居塚城の可能性がある。

### 3 稲居塚城の縄張りについて

稲居塚城は標高84mを測る金塚山の複数の山頂部を中心に築かれている。構造としては山頂や尾根筋の頂部を削平し、斜面に切岸を施す比較的単純な構造である。金塚山は東西二か所の頂部があり、西側頂部が主郭（Ⅰ郭）で、円墳（福岡市の遺跡名称で上月隈古墳群）の墳頂部を削平している。この古墳は地元では金塚と呼び、地元の古老人の話では、以前は石室に入ることが出来たという。その主郭の周りを狭い削平地が階段状に巡る。主郭部山頂から南・東・西郭方向に延びる尾根筋に曲輪が広がる。南側に延びる尾根筋（Ⅱ郭）には石を積み上げた祠（石積みの状況から古墳の石室の残骸か）があり、鐘塚城跡（反対面は稲居塚城）と彫られた石碑がある。また主郭の東側、一段下がった低い平坦面を挟んだ山頂部も雜木が生い茂るが、平坦に削平を加えており曲輪（Ⅲ郭）と思われる。ここにも古墳と思われる高まりがある。この丘陵西側尾根筋にも削平地が段状に続く（Ⅳ郭）が、部分的に竹林や果樹園など後世の造成の可能性もあり、今報告では一部を報告する。また、削平地は図で記した以外にも見られるが、城以外の削平地の可能性もあるため測量していない。また主郭から南西約140m離れた標高70mを測る別の山頂には出丸と思われる削平地がある。頂部には五穀神が祀られている。今は麓の集落に移されたが、光安筑後守の墓はこの頂部の西端に残る古堂の中にあった。この出丸の東側の尾根筋には今は埋められて山道となっているが、堀切らしきものがある。『拾遺』には稲居塚城は山上平地東西七間、南北四間半で、この山の続きに金居塚城があり、山上に平地がある。この二城は一城で、一つは本丸、一つは二の丸であると書かれている。この記述から見ると、本丸は西側山頂の平坦面で、この部分が稲居塚城、東の山頂部が二の丸の金居塚城に当ると考える。稲居塚城での表探し物ではなく、遺物から時期の推定は出来ないが、文献などから16世紀後半～末頃までのもの

のである。

稻居塚城域の現在確認した範囲は東西260m、南北150mとなる。稻居塚城、金居塚城の名称にある「塚」の一文字は曲輪内に残る古墳から由来するのか。また城主に複数の名が残るのは各頂部に籠っていた席田郷党の土豪・地侍の名であった可能性がある。城に関する周辺の遺構であるが、金塚山北西側にある東側に切り通し道を挟む丘陵先端部北側で、福岡市が道路建設に先だって行った調査（上月隈遺跡文献⑤・⑥）で、堀切や館の区画溝などを検出した。出土遺物の時期は15世紀後半～16世紀と幅があるが、稻居塚城の里城、又は「蓮田切寄せ」に関する遺構の可能性がある。

#### 4 おわりに

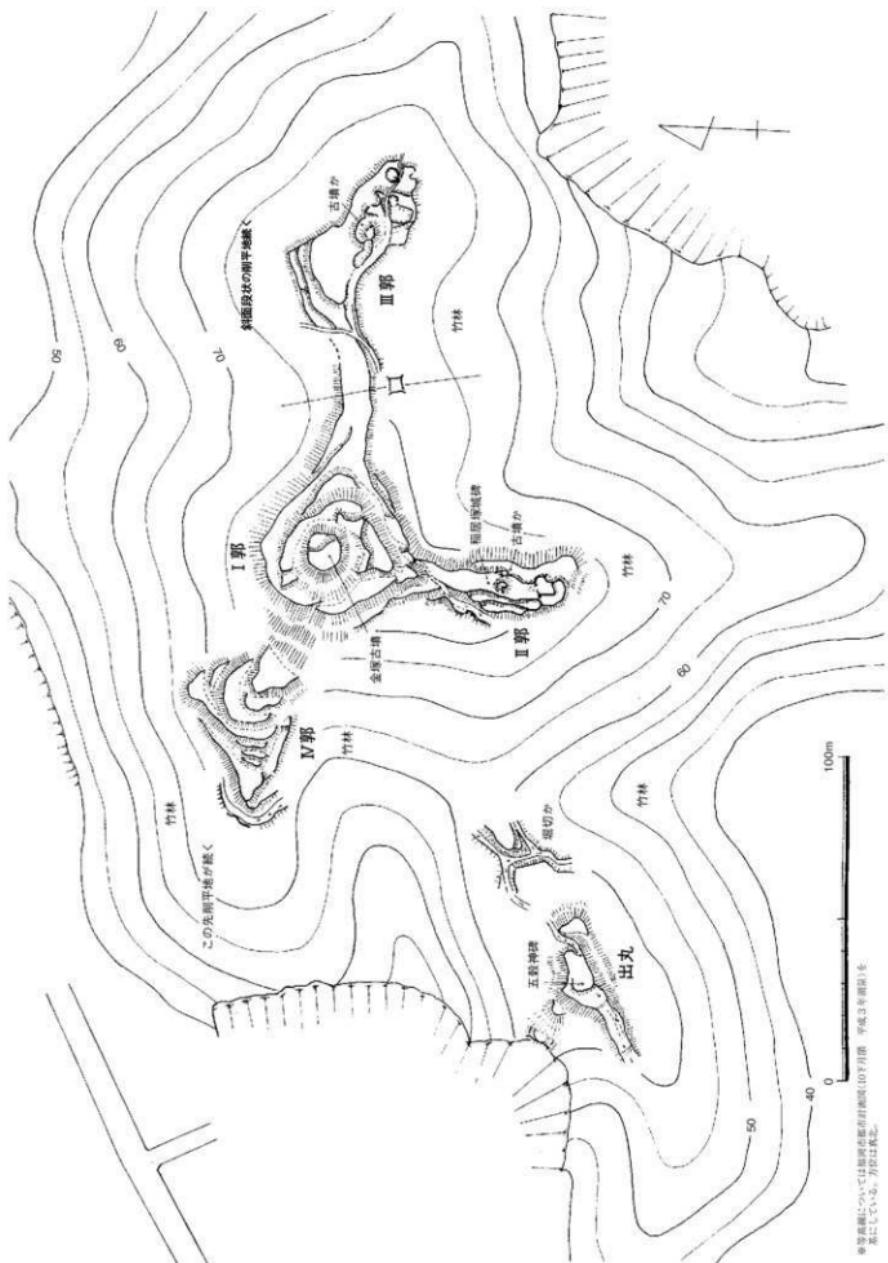
稻居塚城は比較的標高の低い丘陵頂部に立地し、尾根筋に削平を加え平坦面を作り出し、斜面に切岸を加えた程度の構造である。堀切や斜面に構築される堅堀、土塁などはっきりと確認出来ていない。同区内の席田青木城と規模・立地・構造において共通する。地元の小勢力により築城されたものであろう。合戦時において周辺の村人が避難場所として臨時に籠る村の城的要素を持っていたと考える。ただ稻居塚城は、江戸時代の地誌の記述にもあるように立花城の支城的面もある。いずれにせよ両城は立花氏の支配下で築かれた城といえよう。稻居塚城の縄張り図作成は地元のご理解を得て行った。文末ではあるが記して感謝の意を表する次第である。

#### 註

- ①山崎龍雄「福岡市博多区所在の二つの山城」『北部九州中近世城郭情報紙19』2010
- ②福岡市教育委員会 「席田青木遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集 1993
- ③志免町教育委員会 「中山遺跡」志免町文化財調査報告書第10集 2000
- ④中西義昌編『歴史史料としての戦国期城郭』地域資料叢書5 2001
- ⑤福岡市教育委員会「上月隈遺跡群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集 2000
- ⑥福岡市教育委員会「上月隈遺跡群3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第634集 2000
- ⑦福岡市教育委員会「上月隈遺跡B遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第742集 2003



第1図 稲居塚城の位置と周辺の調査区（縮尺1/5,000）



第2図 稲居塙城縄張り図（縮尺1/1,500）※平成22年4月～7月筆者略測作成



写真1 稲居塚城遠景（北西から）



写真2 稲居塚城近景（北西から）



写真3 I郭主郭の状況



写真4 II郭にある鐘塚城碑



写真5 II郭にある祠（古墳の残骸か）



写真6 III郭の状況（中央部が古墳か）



写真7 III郭遠景（南から）



写真8 出丸頂部の平坦面（東から）

## 報告書抄録

書名	上月隈4 かみつきぐま		
副書名	上月隈遺跡第4次調査報告		
巻次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第1112集		
編集者名	本田浩二郎・山崎龍雄		
発行機関	福岡市教育委員会		
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL092-711-4667		
発行年月日	2011(平成23)年3月18日		
調査期間	2009.04.16~2009.07.03		
調査面積	757.71m <sup>2</sup>		
調査原因	公民館施設建設／記録保存		
所収遺跡名	上月隈遺跡 かみつきぐまいせき		
所在地	福岡県福岡市博多区月隈3丁目27番地		
市町村コード	40132	遺跡番号	0032
北緯	33° 34' 09"	東經	130° 28' 04"
種別	集落	主な時代	弥生／中世
主な遺構	溜井遺構／井戸1／溝／土坑／自然流路		
主な遺物	弥生土器／石器／木製品／土師器／須恵器／貿易陶磁器／曲げ物／銅錢など		
特記事項	弥生時代中期末から後期にかけて使用された溜井遺構を検出。 縄文時代晩期の土器・石器群を検出し、月隈丘陵縁辺部に該期の集落が想定された。		

### 上月隈4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1112集

上月隈遺跡第4次調査報告

2011年3月18日発行

発行 福岡市教育委員会

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

